

愛知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第4集

^{おお}大 ^{ぶち}渚 遺 跡

^あ阿 ^み弥 ^だ陀 ^じ寺 遺 跡

1 9 8 8

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

序

愛知県海部郡甚目寺町は、尾張平野を南北に流れる五条川下流の右岸にあり、弥生時代以降絶えることなく人々が生活を営み続けてきた町であります。町名の由来となった甚目寺観音を始めとする数多くの文化財、遺跡が所在しております。

昭和61年度に、財団法人愛知県埋蔵文化財センターでは、甚目寺町の西部を流れる福田川の整備事業に伴う事前調査として大洲遺跡、阿弥陀寺遺跡の発掘調査を愛知県からの受託事業として実施しました。その結果、弥生時代及び鎌倉・室町時代の遺構・遺物の検出、弥生時代の環濠集落の確認等、多くの知見を得ることができ、ここに、その調査結果をまとめ、報告書を作成しました。本書がひろく歴史研究の資料として活用されとともに、埋蔵文化財に対する御理解の一助となることができれば幸いであります。

発掘調査の実施にあたりましては、地元住民の方々を始め、関係者及び関係機関の御協力と御指導をいただきましたことに対し、厚くお礼申し上げます。

昭和63年 3 月

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

理事長 中 根 昭 二

目 次

I 序 章	1
1 調査にいたる経緯	1
2 調査の経過	3
3 遺跡の立地と環境	3
II 調査地区	5
1 大 湊 遺 跡 (I J O 61 地点) の調査	5
2 阿弥陀寺遺跡 (I J A 61A地点) の調査	24
3 阿弥陀寺遺跡 (I J A 61B地点) の調査	31
III 自然科学的分析	
「中世土器」の胎土分析 (重鉍物)	37
IV 考 察	44
1 阿弥陀寺遺跡周辺の弥生時代遺跡の立地について	44
2 阿弥陀寺遺跡の「環濠集落」について	47
3 結 語	49
付 載	50
1 阿弥陀寺遺跡 (I J A 60地点) の調査	50
2 方領遺跡 (I J H 60地点) の調査	55

表 目次

表 1 調査の経過等	3
表 2 分析試料一覧	38
表 3 胎土重鉍物組成	39
表 4 阿弥陀寺遺跡周辺の弥生時代遺跡	40

挿 図 目 次

第1図	調査区位置図……………	2	第19図	I J A 61A区 遺構図……………	28
第2図	飛行場位置図……………	3	第20図	下層遺構出土の遺物……………	29
第3図	遺跡の位置図……………	4	第21図	阿弥陀寺遺跡 (I J A 61B) 調査 区位置図……………	31
第4図	大洲遺跡調査区 位置図……………	5	第22図	I J A 61B区 土層図……………	33
第5図	大洲遺跡 土層図……………	6	第23図	I J A 61B区 遺構図……………	34
第6図	大洲遺跡 遺構図……………	9	第24図	遺物実測図……………	35
第7図	壺形土器の分類……………	10	第25図	重鉈物組成……………	40
第8図	遺物実測図(1)……………	11	第26図	遺物実測図……………	41
第9図	遺物実測図(2)……………	12	第27図	旧地形復元図……………	45
第10図	遺物実測図(3)……………	14	第28図	阿弥陀寺遺跡環濠集落 想定図 (貝田町・高蔵期) ……	48
第11図	遺物実測図(4)……………	15	第29図	阿弥陀寺遺跡 (I J A 61A) 調査 区位置図……………	50
第12図	遺物実測図(5)……………	18	第30図	I J A 60区 土層図……………	50
第13図	遺物実測図(6)……………	19	第31図	I J A 60区 遺構図……………	51
第14図	遺物実測図(7)……………	21	第32図	遺物実測図……………	53
第15図	遺物実測図(8)……………	22	第33図	方領遺跡 調査区位置図……………	55
第16図	阿弥陀寺遺跡 (I J A 61A) 調査区位置図……………	24	第34図	方領遺跡 遺構図……………	56
第17図	I J A 61A区 土層図……………	26			
第18図	上層遺構出土の遺物……………	28			

図 版 目 次

図版 1	大洲遺跡	図版 4	阿弥陀寺遺跡 (I J A 61B区)
図版 2	阿弥陀寺遺跡 (I J A 61A区)	図版 5	出土遺物(1)
図版 3	阿弥陀寺遺跡 (I J A 61B区)	図版 6	出土遺物(2)

例 言

1. 本書は愛知県海部郡甚目寺町に所在する阿^あ弥^み陀^だ寺遺跡及び大^{おお}湊^{おうち}遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、愛知県土木部河川工事事務所がすすめている2級河川福田川整備事業に伴うものであり、県土木部より愛知県教育委員会を通じて委託をうけた（財）愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は、昭和61年10月から昭和62年3月までである。
4. 発掘調査は、（財）愛知県埋蔵文化財センター課長補佐竹内尚武，同主事北村（旧姓浅井）和宏，同嘱託菅沼良則が担当した。
5. 調査に際しては、次の関係機関の指導・協力を得た。
愛知県教育委員会文化財課，愛知県土木部河川工事事務所，愛知県海部郡甚目寺町教育委員会，同農業振興課
6. 遺物の整理・製図等は，調査参加者全員で行い，次の方々の協力を得た。
石原智恵子，加藤とよ江，市川浩代，坪井裕司，伊藤伸幸，長井富美男，平岩圭子，吉田久子，山田久美子，津坂貴美子（敬称略）
7. 調査区の座標は，建設省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し，これを示した。
8. 本書の執筆・編集は北村が担当した。
9. 調査に関する資料は全て（財）愛知県埋蔵文化財センターで保管している。

I 序 章

1. 調査に至る経緯

愛知県土木部河川工事事務所では、2級河川福田川の整備事業を継年で実施している。整備事業の一環として、福田川に存置されている新居屋立切等の農業用水施設の撤去が必要となり、その代替措置として昭和59年度から4か年で小池用水の整備が計画された。この工事は、既設の小池用水から分水するパイプラインを総延長4.1kmにわたり布設するというもので、パイプラインのコース上に周知の遺跡である阿弥陀寺遺跡、方領遺跡が所在した。このため河川工事事務所では、工事に先立ちその取り扱いについて愛知県教育委員会、海部郡甚目寺町教育委員会と事前協議を行った。この結果、まず試掘調査を行い、遺跡の範囲・基本層序等を確認した上で、工法上の問題を含めて検討し、必要あらば発掘調査を実施することとなった。

試掘調査は、県教委により昭和60年2月1日から18日にわたって行われ、その結果、試掘坑No.17・No.21周辺については立会い調査、また石作神社（甚目寺町石作）東から環状2号線（一般国道302号）の間及び環状2号線以南においては発掘調査が必要となった。No.17周辺（方領遺跡）・No.21周辺（阿弥陀寺遺跡）については県教委の指導下、甚目寺町教委が昭和60年度に立会い調査を行い、環状2号線の周辺2地点（阿弥陀寺遺跡）については昭和61年度に発掘調査を行うことになった。この昭和61年度分については、県土木部から県教委を通じて（財）愛知県埋蔵文化財センターが実施することになり、本書に報告する阿弥陀寺遺跡2地点（IJA 61A・B地点）について発掘調査を行ったのである。

一方、昭和61年3月、さらに河川工事事務所から甚目寺町大字甚目寺地内の大洲遺跡の範囲内で福田川整備事業に伴うポンプ場建設計画が示された。このため、県教委では発掘調査が必要であると判断し、協議の結果、上記阿弥陀寺遺跡と同様に（財）愛知県埋蔵文化財センターが調査を実施することになった。

なお、本書では、県教委、甚目寺町教委が昭和60年に立会い調査を行った阿弥陀寺遺跡（IJA 60地点）、方領遺跡（IJH 60地点）の調査概要についても付載として収録した。

2 1. 調査に至る経緯



第1図 調査区位置図 (1 : 15,000)

2. 調査の経過

調査の経過については第1表に示すとおりである。個々の地点の発掘調査の経過については、調査区毎に記することとする。

第1表 調査の経過等

遺跡番号	遺 跡 名	調査地点	所 在 地	担 当	期 間	面 積	備 考
—	(試掘調査)		愛知県海部郡基目寺町 大字方領ほか	愛知県教委・ 基目寺町教委	昭和61年 2月1日～18日	676㎡	試掘坑26箇所
31008	阿弥陀寺遺跡	IJA60	〃 大字石作	〃	昭和61年2月	100㎡	付載1
31007	方 領 遺 跡	IJH60	〃 大字方領	〃	〃	60㎡	付載2
31011	大 洲 遺 跡	IJO61	〃 大字基目寺	(財)愛知県埋蔵 文化財センター	昭和61年 10月～11月	400㎡	
31008	阿弥陀寺遺跡	IJA61A	〃 大字石作	〃	昭和61年 11月～12月	360㎡	
31008	阿弥陀寺遺跡	IJA61B	〃	〃	昭和62年 1月～2月	660㎡	

遺跡番号は「愛知県遺跡分布図(Ⅰ)尾張地区」(愛知県教育委員会1986)による。

3. 遺跡の位置と環境

本州のほぼ中央に位置する濃尾平野は、木曽川を境として、右岸の美濃平野、左岸の尾張平野とに分けられる。

今回、発掘調査を実施した大洲遺跡・阿弥陀寺遺跡(愛知県海部郡基目寺町)は、この尾張平野の中央をほぼ南北に流れる五条川下流の右岸、標高1.0m前後の自然堤防地帯の一角に所在する。

現在、遺跡の周辺は、平坦な水田地帯となっているが、これは、第二次世界大戦時における飛行場の造営(第2図)、戦後の開墾・水田化によるものである。往時は、第27図に示すような地形を呈しており、遺跡は微高地およびその後背湿地にかけて展開していたことが知られる。

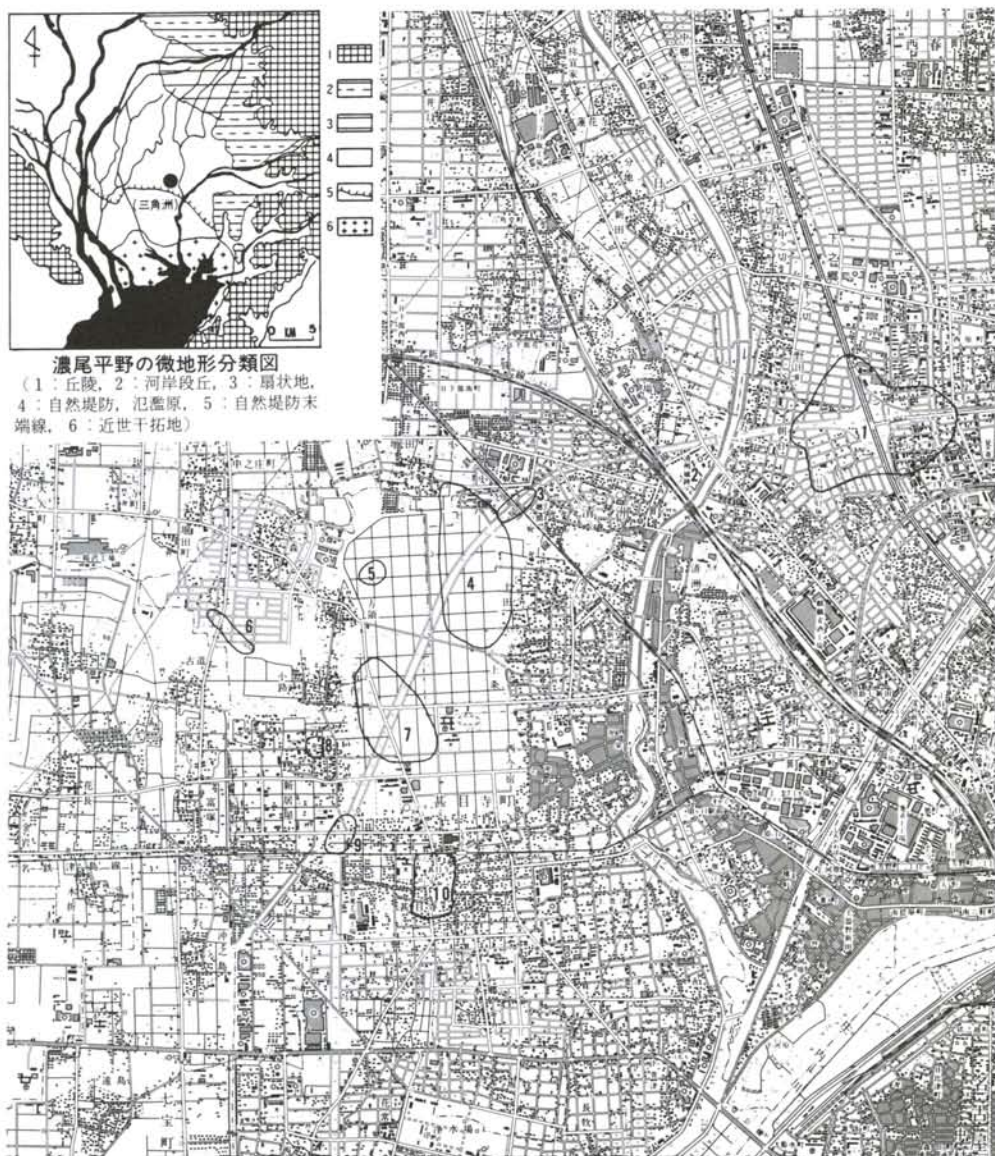
すでに、大洲・阿弥陀寺遺跡については、環状2号線建設に伴う事前調査として発掘が行われており、大洲遺跡は、弥生時代(高蔵期)及び古墳時代～鎌倉時代にかけて集落跡を主体とする遺跡であり、阿弥陀寺遺跡についても、弥生時代の環濠集落(貝田町～山中



第2図 飛行場位置図

期)及び鎌倉・室町時代の集落跡であることが知られている。

遺跡周辺の甚目寺町から稲沢市、西春日井郡清洲町にかけての自然堤防帯は多くの遺跡が集在する地帯である。大淵・阿弥陀寺遺跡の周辺には、弥生時代の尾張平野の中心的集落遺跡である朝日遺跡、古墳時代初頭の前方形周溝墓で著名な廻間遺跡、7世紀末に造営され今日に至る甚目寺、室町時代末から江戸時代初頭にかけて尾張の中心的城郭であった清洲城等々が存在している。阿弥陀寺、大淵遺跡の消長もこうしたものの動きの中で理解される必要があろう。



第3図 遺跡位置図(1:50,000)

1. 朝日遺跡 2. 清洲城本丸跡 3. 廻間遺跡 4. 土田遺跡 5. 方領遺跡 6. 森南遺跡 7. 阿弥陀寺遺跡 8. 法性寺
9. 大淵遺跡 10. 甚目寺

II 調査地区

1. 大渕遺跡（IJO 61地点）の調査

今回の発掘調査地点は、愛知県海部郡甚目寺町大字甚目寺字大渕で、環状2号線建設に伴う事前調査として本センターが発掘した大渕遺跡の調査地域の北西部にあたる。調査区は遺跡の立地する東西方向に長い帯状の微高地の北側から後背湿地—旧河道—への移行部にあたる。今回の調査においては、大渕遺跡の立地する微高地北端における様相の把握、殊に弥生時代についていえば環濠の有無の確認、微高地の沿辺に存した旧福田川の開削年代の解明等に主眼をおいた。

発掘は、調査区の南半で旧水田耕作土・床土までを、北半の旧福田川河道部においては昭和初期から20年代にかけて埋立られた面までを重機により掘削した後、人力で掘下げるという方法で行った。ただ、旧河道については当初全面的な掘下げを企図したが、排土置き場が狭いこと、調査区が内狭なため地表面から3mを越える掘下げは危険が伴うことからこれを断念した。



第4図 大渕遺跡調査区位置図（1：5,000 アミは環状2号線関連調査区）

6 1. 大洲遺跡（IJO 61地点）の調査

なお、環状2号線内での既往の調査概要については下記を参照されたいが、現在までに、この大洲遺跡は、弥生時代（高蔵期）および古墳時代（6世紀）～鎌倉時代を主体とする集落遺跡であることが判明している。

（愛知県教育サービスセンター 『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅱ』1984

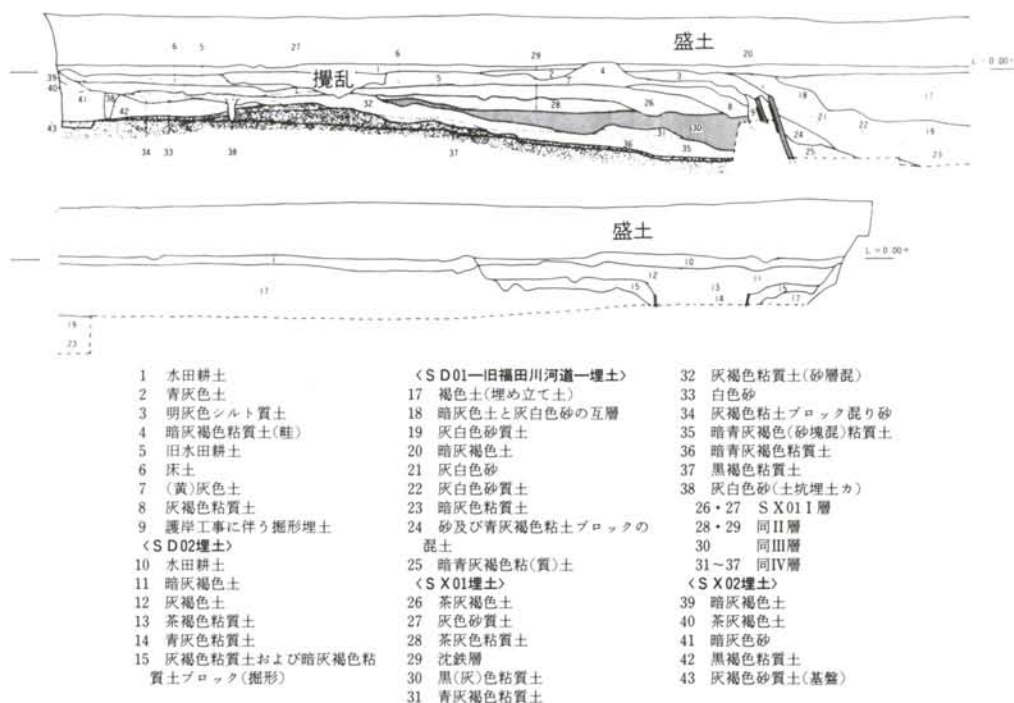
同 上 『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ』1985

（愛知県埋蔵文化財センター 『年報 昭和60年度』 1986

同 上 『年報 昭和61年度』 1987

基本的層序

上記のように発掘区の北半は旧福田川の河道跡にあたる。そこで南半における基本的層序をみていくと、上から現耕作土（畑）、近年の盛土、旧水田耕作土・床土（Ⅱ）、第二次世界大戦前後の整地（？）土層、旧水田耕作土・床土（Ⅰ）、遺物包含層（便宜的にⅠ～Ⅳ層に分層）、砂層及びシルト質土の互層（基盤）である。この基盤（無遺物層）は、調査区の南端（標高0m前後）から8mほどやや緩く傾斜した後、急傾斜をなして下り、旧福田川の河道の護岸部あたりで再び傾斜をゆるめる（標高-2.0m）。調査区の北半の旧福田川の河道部の層序は、上より現耕作土（畑）、近年の盛土、旧水田耕作土・床土（Ⅱ）、昭和



第5図 大洲遺跡土層図（1：160）

初期から20年代にかけての埋立土、(基盤……未検出)の順である。後者の河道埋立土の上面に旧水田耕作土・床土(II)に対応する水路がみられる。また旧河道の護岸(木杭、矢板)は水田耕作土(I)に対応する。基本的層序のなかでさきに「遺物包含層」とした層は、基本的に粘質土と砂質土の互層からなるもので、下方に移るにつれて粘質土層が厚く、砂層がいわば間層として入る状況を呈していた。遺物取り上げの際に用いた遺物包含層I~IVの分層は、これらを便宜的にまとめたものでありこの点でこの土層が堆積の画期と一致するか否かについては問題がある。ちなみに、I~IV層中の遺物は、この順で古いというわけではなく、I~IV層中の遺物は、いずれも弥生時代から室町時代にかけての遺物が混在しており、遺物包含層の形成が、整然としたものではなかったこと、およびその形成の時期等が知られる。

遺 構

今回の調査で検出された遺構は、土坑1基(SK01)、旧福田川河道跡(SD01)がみられたほか、人為的な所産とは考え難い北方へ傾斜する「落ち込み」(SX01)及び西方への「落ち込み」(SX02)がある。

SK01 調査区の南部の基盤微高地上SX01の遺物包含層を下げたところで検出された土坑。南北方向に長軸をとり、現状で長さ6.0m、巾2.0mを測る。断面形は略半円形を呈し楕円形プランをなす。その北端は微高地(基盤)が急斜面となる斜面に連続しており、砂層が幾層も入り流水の状況を呈する埋土からして、「溝」の遺存部分の可能性はある。

SX01 調査区南端から河道方向へ傾斜する「落ち込み」を仮に「SX01」とよびその上にある遺物包含層を同じくSX01の埋土とよぶことにする。このSX01は調査区の南端から8mほどは緩傾斜をなし、いわば「テラス」状となっているが、この平坦面が人為的な所産なのか否かについては明らかにし得ない。斜面上に遺物包含層がみられるが、これは旧河道の護岸により断ち割られている。包含層は、この斜面の傾斜におおむね対応した形で堆積、形成されている。便宜的にこれをI~IV層に分ったことは、基本的層序の項で述べたとおりである。また上述のようにこのI~IV層はいずれにも弥生時代から室町時代(15世紀代)にいたる遺物を包含しており、室町時代末(厳密に云えばそれ以後)に形成されたものと推察される。そしてその場合、包含層中の遺物に環状2号線用地内での発掘調査で未検出の時期の遺物が見られることから包含層中の遺物には旧福田川の上流、例えば阿弥陀寺遺跡、土田遺跡(清洲町)等の遺跡から流出してきたものが含まれている可能性が高い。こうした埋土・遺物の状況からすれば、このSX01は旧福田川(江戸時代~)以前の(自然)流路の可能性はある。

SX02 調査区の西南隅で検出された西方への「落ち込み」を仮にSX02と呼ぶ。このSX02はSX01によって切られておりSX01よりも古い時期のものである。埋土は、SX01と同様の層状堆積をなし、その埋土中から14世紀代に比定される遺物が出土している。

旧福田河道跡（SD01） 調査区の北半で検出された。護岸の造作は、少なくとも左岸に関する限り、SX01上の遺物包含層をたちわって構築されている。断面観察等で確認し得たところでは木杭（長さ1.5mほど）を千鳥に打ち、木杭の間に矢板（長さ0.8m）を横にならべるということを二重に行なっている。この造作は右岸も同じである。護岸の杭列間で川幅は約22mを測る。河道の断面形等については、埋立土を全面的に掘削するにいたらなかったので不明である。河道の中央やや北寄りの地点、河道跡の埋立土上の旧水田耕作土（II）と対応して巾1mほどの水路の跡（SD02）がみられた。護岸は木杭と矢板でもって構築されている。これは昭和24年ごろ米軍が撮影した航空写真（第2図）に写っており、当時、機能していたことが伺われる。なお、今回検出した旧福田川の部分に関する限りでは、その護岸が室町時代（16世紀代）の遺物を含む層を断ち割って造作されていることから、それ以後の所産と考えられる。このことは、旧福田川が悪水路として江戸時代のはじめごろに開削されたという所伝と一致する。

出土遺物

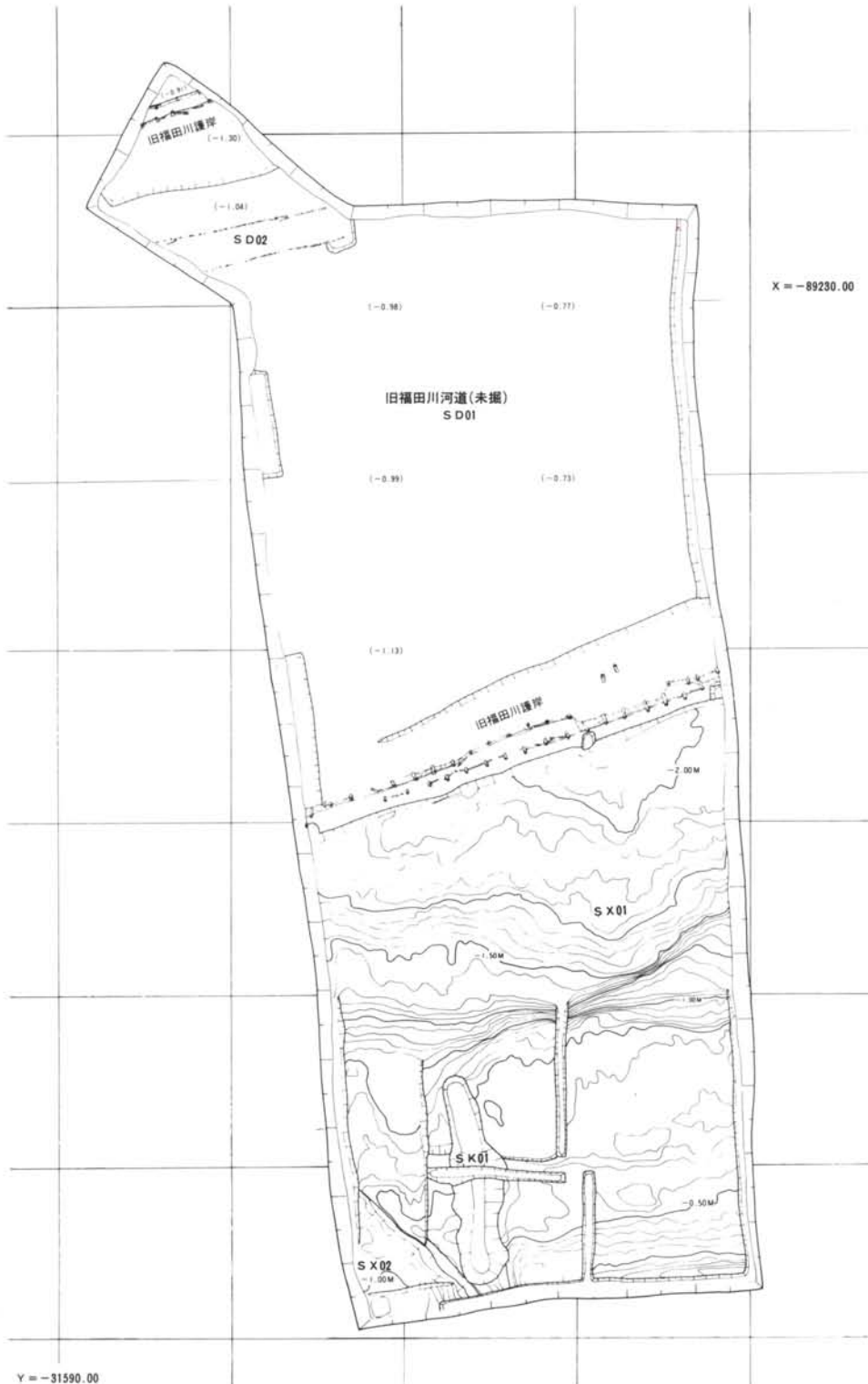
今回の発掘調査で出土した遺物は、大半を占める土器・陶磁器類のほか若干数の石製品、木製品である。遺構に伴って出土したものは少なく大多数はSX01の埋土（埋土というよりは遺物包含層）中よりの出土である。以下、SK01、SX01、SX02の順で出土遺物について報告する。

SK01出土遺物

須恵器、灰釉陶器（瓷器）、灰釉系陶器碗（山茶碗）がみられる。須恵器（89）は杯身で、内外面ともロクロナデ調整、古墳時代後期（6世紀代）に位置づけられる。113は、高台付の杯身の底部片で、底外面に回転ヘラケズリ調整痕がみられる。灰釉陶器は図示し得なかったが碗の底部片で所謂「三日月」形に近い形態の高台をもつものである。黒笹第90号窯式に比定される。灰釉系陶器碗（168）は、体部が幾分内弯し、口縁部が強いヨコナデで外反する形態をなし、底内面には所謂「殺し」が顕著に施されている。13世紀代に比定される。

SX01出土遺物

上述したように遺物包含層をI～IV層に分って遺物取り上げを行ったが、特定の層位に伴って単一の時期の、あるいは年代的にまとまりをもつ遺物は認められず、I～IV層とも弥生時代～室町時代の遺物が混在して包含されていた。従ってここでは層位にとらわれ



第6図 大淵遺跡 (IJO61調査区) 遺構図 (1:200)

ずに、便宜的に次のような区分で遺物について記述を進めていくこととする。A弥生土器、B土師器、C須恵器、D灰釉陶器（瓷器）、E「中世陶器」、F「中近世の土器」、G中国製磁器、H土錘、I木製品、J石製品である。量的にはA～Eが多く、F～Jについてはごく少量である。

A. 弥生土器

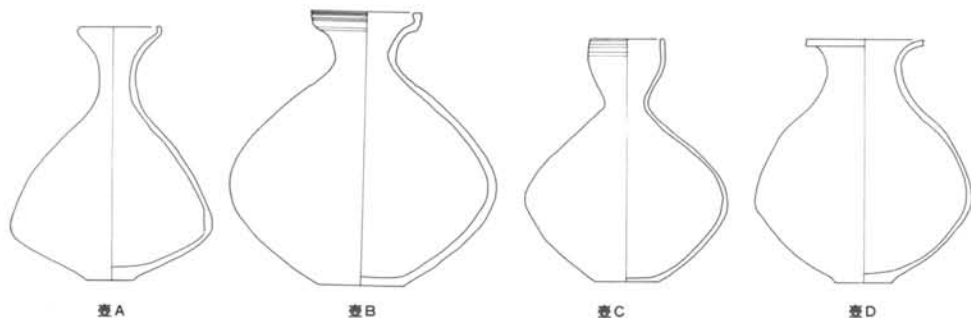
弥生土器は出土遺物のうちの大多数をしめるが、その大半は小片で、図示し得るものは少ない。器種としては壺、甕、鉢がみられる。これらはその形態・紋様・調整手法等からみて従来の土器編年でいうところの「貝田町式」～「高蔵式」に比定されるものである。

壺形土器

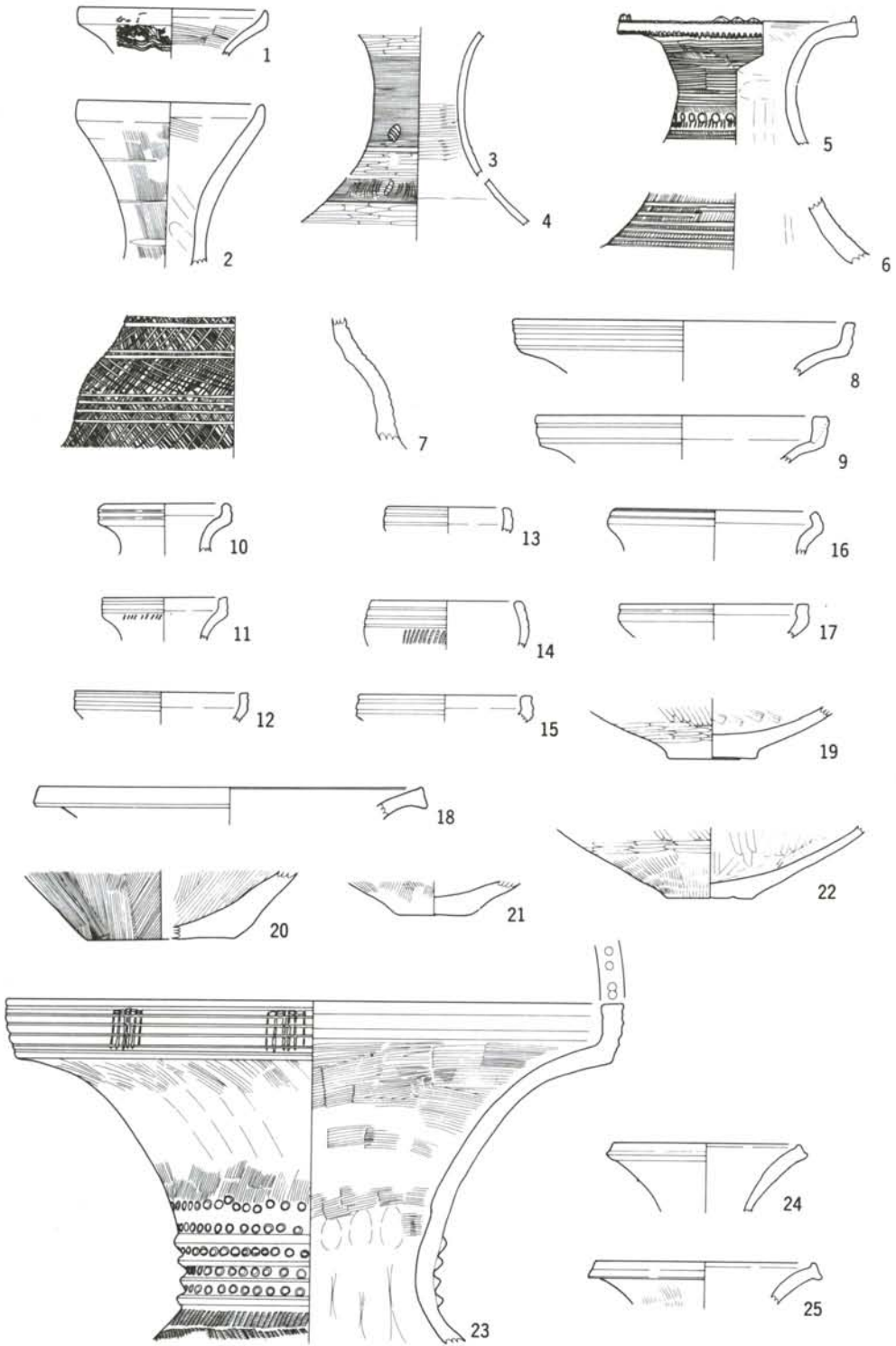
壺形土器には、所謂「細頸壺」と「広口壺」とがみられる（第7図）。細頸壺は口縁部の形態の相違からA～Cの3つに細別される。

壺A（1～4）は、胴部に比べ著しく細長い筒状の頸部で、口縁部にうつるにつれやや外反し、口縁端部を短く直立もしくはやや内弯させる形態のものである。1は口縁部をヨコナデし、頸部を波状紋II種C（小林、佐原1964）で飾る。3・4は同一個体と考えられるものである。口縁部を欠くが、他の遺跡の出土例からして幾分内弯ぎみの口縁をなし、口縁外面は細かな直線紋が施され場合によっては円形浮紋が貼くものであろう。頸部は、ヘラミガキによる所謂「研磨帯」と細かな櫛描直線紋帯が交互に施され、頸部から胴部にかけて楕円形の浮紋がタテ位に貼付されている。残存する最下段の直線紋帯には直線紋帯を施し浮紋を貼付した後、浮紋を中心にヘラによる円弧が2～3条施されている。2は口縁部をヨコナデし、頸部以下はハケ目調整のままで、3条のヘラ沈線をほぼ等間隔に施している。1～4とも貝田町に比定される。

壺B、（8～12・15～17・23）は、壺Aにくらべ筒状の頸部が短く、口縁部が大きく外反し、口縁部が直立乃至幾分内弯ぎみに立ち上り、口縁部外面に2～3条の凹線紋がめぐるものである。法量からすれば、大（口径36cm）、中（口径20cm前後）、小（口径8～12cm）



第7図 壺形土器の分類

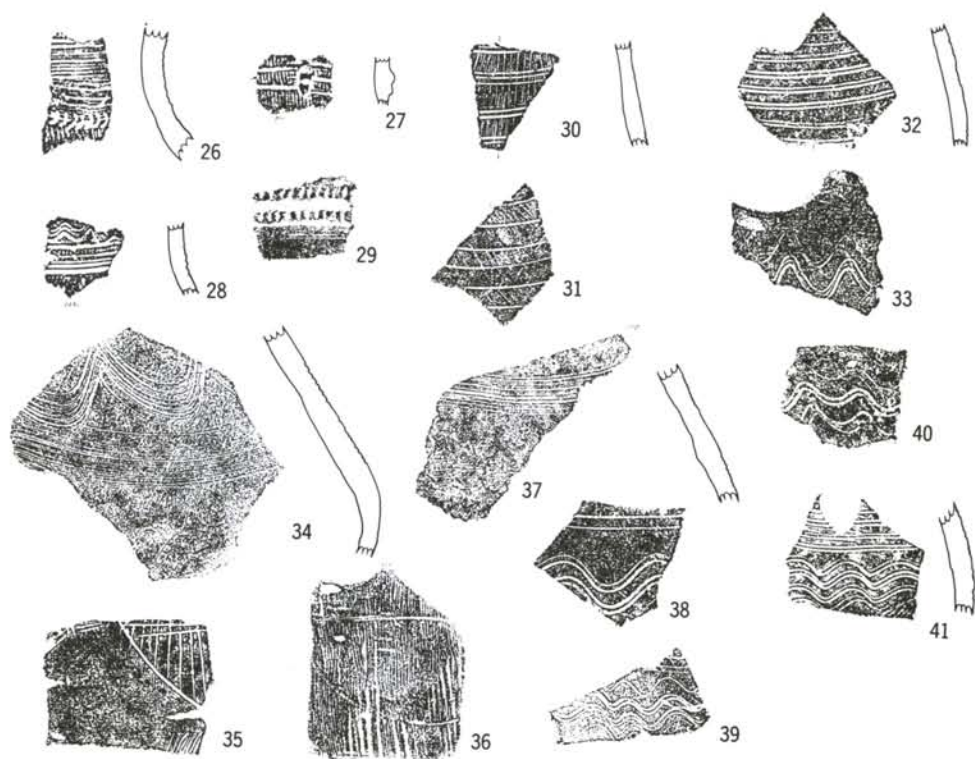


第8図 遺物実測図(1) (1:4)

の3つに分けられる。口縁部の破片が殆どで、11の口縁部凹線紋帯の下端にクシ状工具の刺突による斜線列がめぐるのは23のみである。23は、口径36cmで大形に属し頸部に5条(うち上端の1条は欠落)の貼付の凸帯がめぐり、凸帯の下端の上側に竹管状工具の刺突による円列をめぐらしている。突帯の下、頸部から胴部への移行部位にはクシ状工具の刺突による斜線列をいわば綾杉状にめぐらしている。頸部より大きく外反し、短く直立する口縁部の外面には6条の凹線紋がめぐり、その上にあたかも棒状浮紋の様な6本1単位のキザミがタテに4ヶ所(推定)入れられている。口縁部の上端の巾狭の平坦面には、刺突による(原体不明)の円列がめぐらされている。これらはその形態、技法等から「高蔵式」に比定される。

壺C(13・14)は筒状の頸部は壺Bと同様であるが、頸部がゆるやかに外反したのち口縁部がやや内弯ぎみに立ち上がる形態(所謂袋状口縁とよばれる)で口縁部は巾広で外面に凹線紋が3〜4条ほどめぐるものである。口径は8cm前後で、14は凹線紋帯の下にクシ状工具の刺突による斜線列がめぐっている。これらは「高蔵式」に比定される。

壺D(5・6)は、壺A〜Cに較べると太めの筒状頸部で口縁部が大きくて外反する、所謂広口壺である。5の口縁端面は垂直に近いが、幾分上方を向く。頸部にはクシ状工具



第9図 遺物実測図(2) (1:3)

による直線紋が巾広にめぐらされ、そのなかほどには、クシ状工具の刺突による列点が施され、さらにその上に重複して竹管様のものの刺突による円列がめぐらされている。口縁端部の上端（内面）には竹管状のものをういた半円弧の列点が、下端面にはクシ状工具によるキザミが施され、内面（上面）には3つを一単位とする浮紋がみられる。「貝田町式」に比定される。

7は広口壺の頸部と推察されるが、胴部から頸部への移行部位がふくらんでいる点に特徴がある。紋様はヘラ状工具による格子紋及び直線紋がめぐらされている。三河（愛知県東部）で盛行する「瓜郷式」に比定される。

18・24・25は口縁部が外反し、端部が面をもつもので、これらについては時期を特定し得ない。

第9図は、器形を復し得ない弥生土器の紋様の拓影である。27～29は壺Aの頸部、胴部に通有の紋様である。「貝田町式」に比定される。26・30～32は、壺A～Cでまみられる紋様である。31は調整痕を研磨した「研磨帯」がみられることから「貝田町式」に比定される。

33・38～41は、壺B、Cに多々みられる波状紋である。「高蔵式」に比定される。

34～37は、所謂「獅子懸式」土器にみられる紋様で、35・36はヘラ描きである。

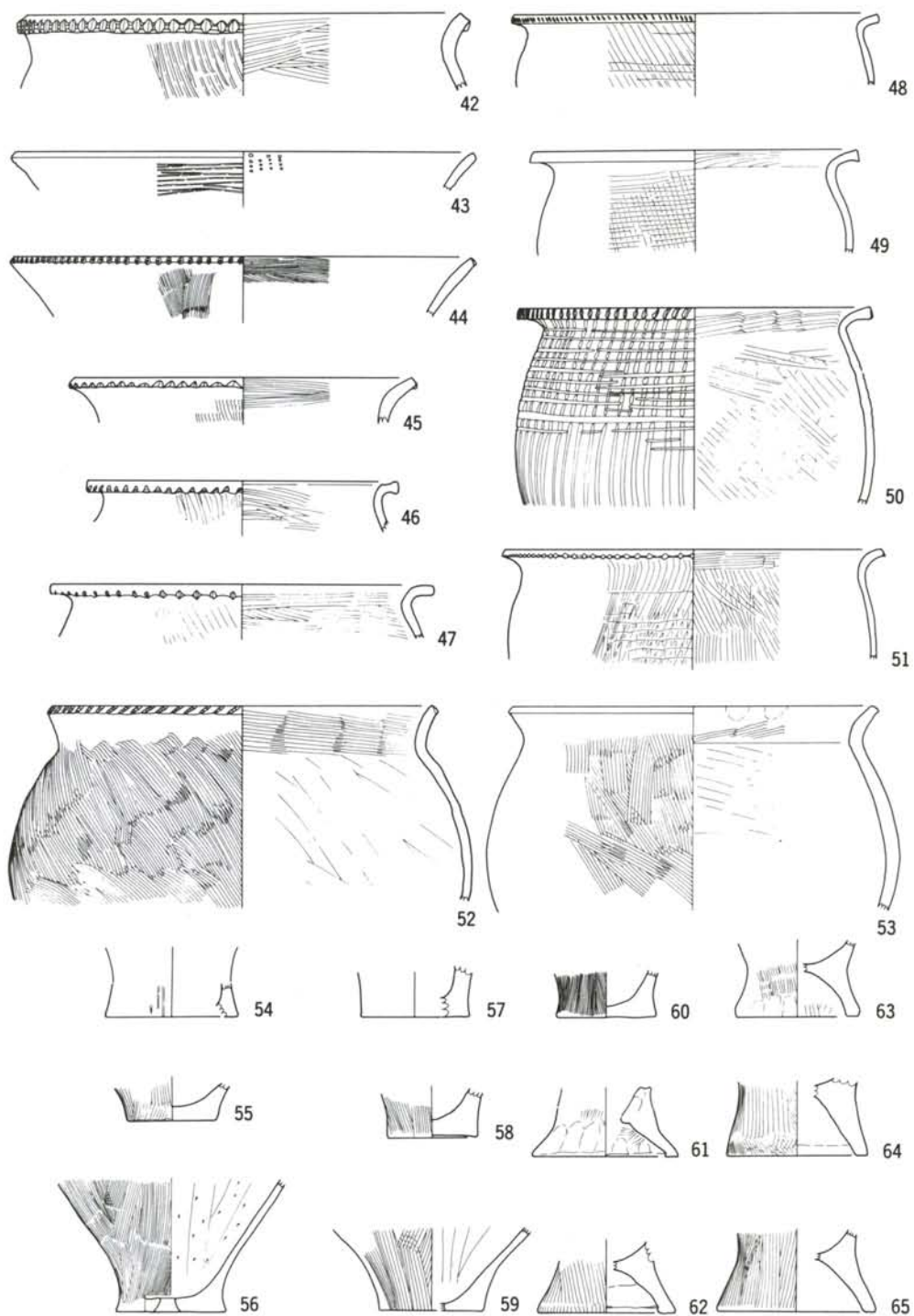
甕形土器

甕形土器は、量的には多いが、胴部片が多く底部から口縁部までを復元し得るものは少ない。

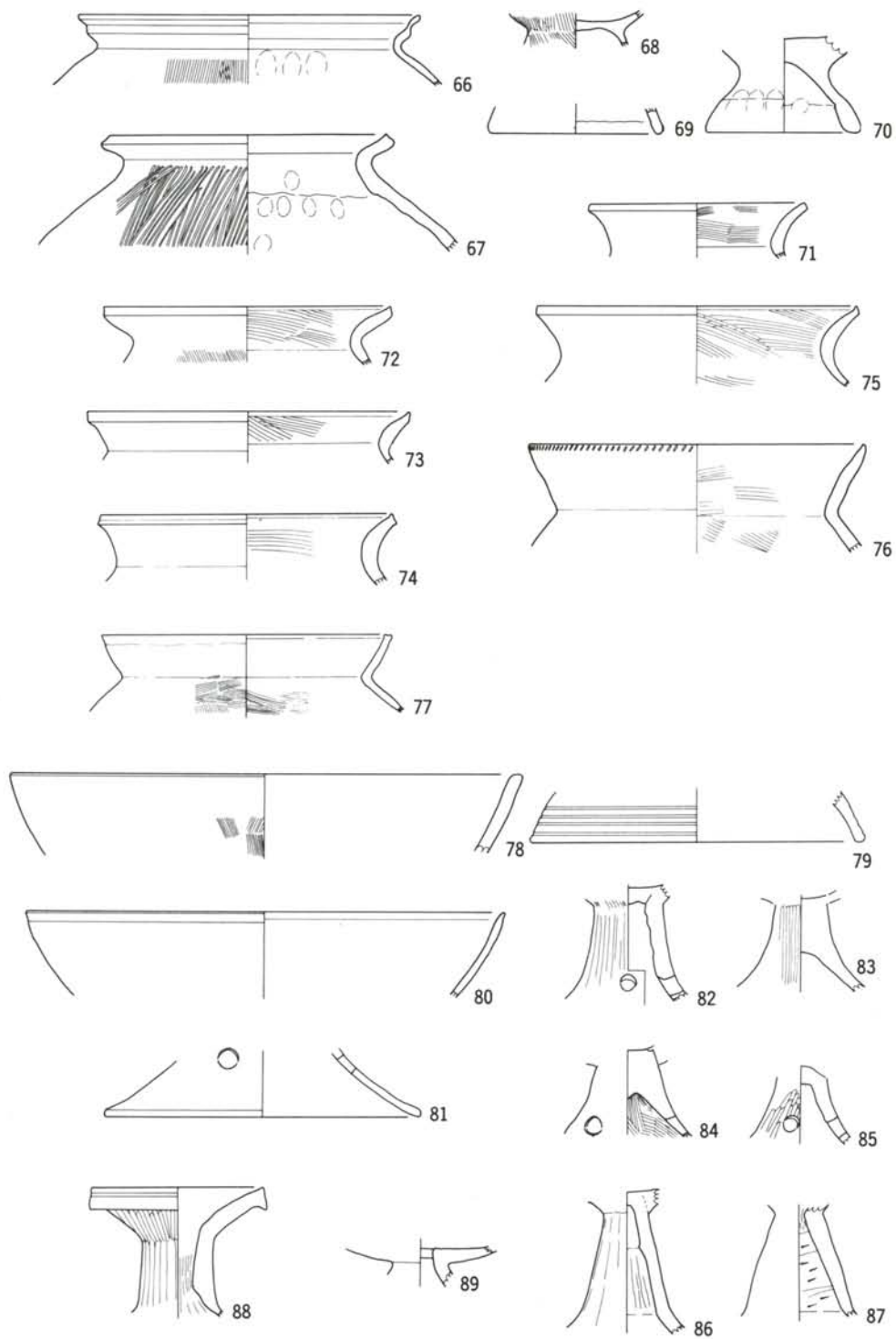
42～45は、口縁部と胴部との境が明確な稜（屈曲）をもたないもので、42・43は外面調整がいわゆる「条痕」であり、44・45はハケ目調整である。43の口縁部内面にはクシ状工具（あるいは「条痕」の原体か）の刺突による斜線列がみられる。

46～51は、口縁部が大きく水平方向に（胴部に大して直角ぎみに）外反するものである。いずれも外面の調整はハケ目調整である。ハケ目調整痕は胴部と口縁部にまたがるものが多くみられる。このことから、これらは胴部と口縁部とはハケ調整のある時点までは直線的であり、その後大きく口縁部を折り返すという手順でつくられたことが知られる。口縁部内面のヨコハケは口縁部を外反させる造作の工程においてついたものと考えられる。48～51は胴部上半にタテ方向のハケ調整後、ヨコ方向のハケ調整を（紋様を意識か）を施している。「ハケ目」は全搬に荒く、殊に10は、ハケの原体が（ハケというよりはクシ状の工具か）かなり大ぶりのものである。

52・53は、球形に近い体部にやや外反（胴部から口縁への移行が「く」の字状を呈す）する口縁部を付したもので、胴部外面のハケ目は、45～51と比べ細密で、1回に施す単位



第10図 遺物実測図(3) (1:4)



第11図 遺物実測図(4) (1:4)

（長さ）が小さい。口縁部外面をヨコナデ調整を行なっている。上記のような胴部から口縁部に連続するハケ目はヨコナデにより消されている。

以上、これらのものの編年的位置は一概に決め難いが、おおむね42～51は、「貝田町式～高蔵式」に比定され、52・53は山中式（～）に比定されよう。

54～65は甕の底部片である。

54～60は底部に台の付かないものである。54は外面が「条痕」調整で、その形態等より貝田町式（～高蔵式）に比定される。61～65は台付甕である。台は低く短くハの字形に開いている。その形状から「高蔵式」に比定される。なお、56は底部に穿孔（焼成後）がみられる。

鉢形土器

78は、鉢形土器の口縁部分である。時期は特定し得ない。79は、台付の鉢形土器の台部で、端部に凹線紋が7条ほどめぐることから「高蔵式」に比定される。

B 土 師 器

便宜的に、「欠山式」土器以後、「中世陶器」の出現までの時代の土器を対象とする。

甕形土器

66～70は所謂「S字状口縁台付甕」である。胎土・色調からみて、67・70は同一個体と考えられる。66・68・69は「元屋敷式」に比定され、67・70は5世紀末の須恵器（猿投窯東山台11号窯併行期）に併行あるいは先行すると考えられるもの（いわゆる宇田型）である。

71～76は、球形乃至長胴の体部に「く」の字形に外反する口縁部がつき、口縁端を少しつまみ上げる形状のものである。いま、これらに詳細な編年的位置を与えることは出来ないが、環状2号線用地内での大洲遺跡の調査では少なくとも6～8世紀代にいたる時期の須恵器と共伴する形態のものである。

77は、球形の胴部に、いく分内湾ぎみの口縁部が「く」の字形につくもので、口縁端部が「面取り」状にナデ調整されており、内端部が幾分肥厚している。所謂「布留式甕」の形態に類似するものである。

甌形土器

図示し得なかったが、甌器の把手が2点みられる。時期は特定し得ない。

高杯形土器

量的に少ない。80は欠山式（～元屋敷式）の口縁部片。81～85は、欠山式～元屋敷式に比定される高杯の脚部片。86～87は、「神明式」前後の高杯脚部分である。

器台形土器

わずかに2点見られた。88は、筒状の台脚に大きく外反する受け部を持ったもの。89は高杯形のもの。

C. 須恵器

古墳時代から奈良、平安時代にいたる各時期のものが見られる。便宜的に猿投窯編年の岩崎第17号窯式（I-17）までを古墳時代とし、高蔵寺第2号窯式（C-2）以降を奈良平安時代として区分する。

古墳時代の須恵器には、杯身（88～90）、杯蓋（91・92）、高杯（135～141）、甕（142・143）、平瓶（146）、壺類（144・145）が見られる。高杯の135・138・139は有透の脚部片である。144は甕の頸部の可能性がある。これらは6世紀～7世紀代にかけての時期に比定される。

奈良・平安時代の須恵器には、高台付杯身（111～121）、無高台の杯身（122～134）、杯蓋（93～110）、長頸瓶（152～155）が見られる。無高台の杯身は、いずれも平底で幾分内湾ぎみの体部がつくもので、体部が直線的に立ち上がるものは見られない。杯蓋102の外表にはヘラ描きが見られる。無高台の杯身122には火樫が見られる。これらは8世紀代から9世紀代にかけての時期に比定されるものである。

なお、このほかに図示し得ないが、甕の底部片が1点みられるが、甕（150・151）、壺類（147～149）とともに時期を特定し得ない。

D. 灰釉陶器（瓷器・白瓷）

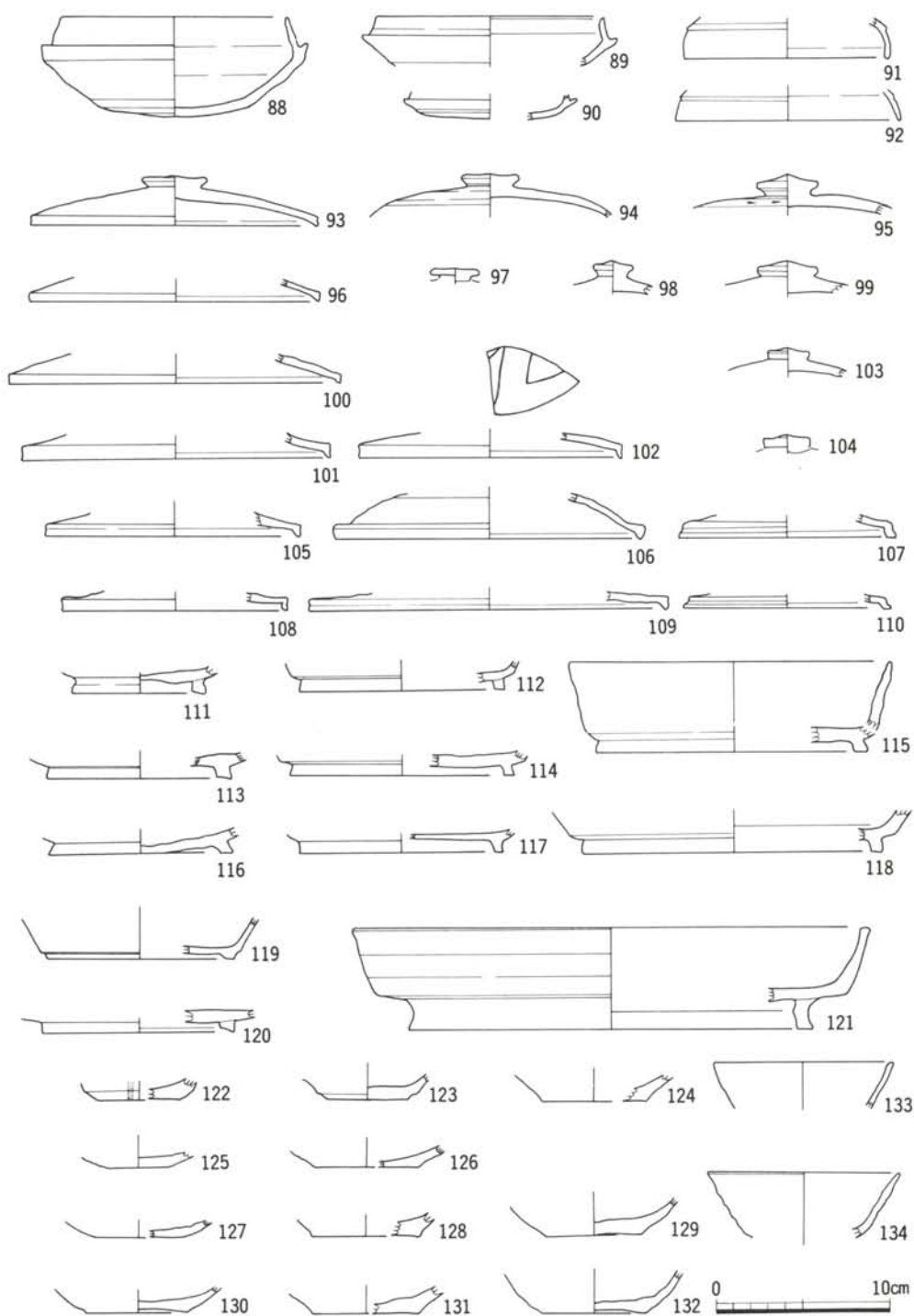
灰釉陶器は量的には少なくかつ小片が多いが、器種としては、碗、皿類及び長頸瓶がみられる。碗・皿類は、施釉技法、高台の形態等から、158は黒笹第14号窯式、159・160は黒笹第90号窯式、161・162は折戸第53号窯式に比定される。長頸瓶の156・157・163～165は時期を特定し得ないが、156は広口瓶ともよばれるもので、折戸第53号窯式に比定されるものである。

E. 「中世陶器」

「中世陶器」には、「灰釉系陶器」および「施釉陶器」がある。以下、便宜的にa灰釉系陶器の碗・皿・鉢類（所謂山茶碗類）、b常滑窯産の壺・甕類、c瀬戸・美濃窯産の施釉陶器に分ち説明する。

a. 灰釉系陶器の碗・皿・鉢

所謂山茶碗類である。碗（166～181）は底部片が多い。内面の底部より体部に移行する部位の様相の相違から大きく3つに大別される。すなわち、内面の底部から体部への移行部位が単一曲線をなすもの（i類）、内面の底部から体部への移行部位に若干の凹みが生じているもの（ii類）、内面底部から体部への移行部が角をなすもの（iii類）の別である。i



第12図 遺物実測図(5) (1:4)

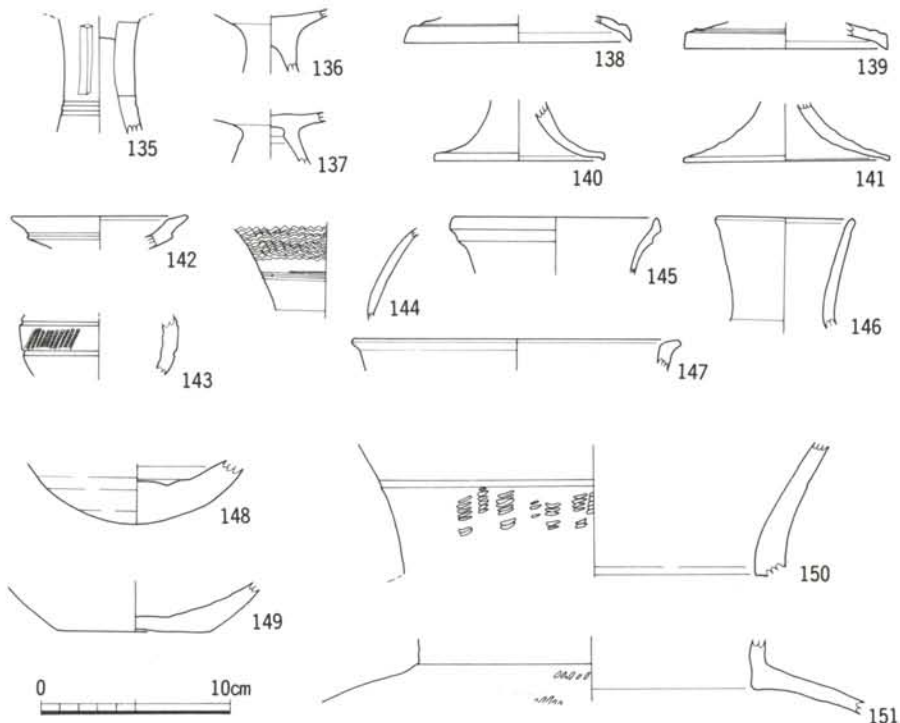
類のものには、166・171・172・175がこれにあたる。これらはいずれも底部内面の中央に深い明確な「殺し」はなく、高台の造作も比較的丁寧である。12世紀代に比定される。ii類のものは、167・168・173・174で、いずれも底内面に「殺し」がみられ、底部の中央が凹む。ii類の特徴とした底部から胴部への移行部の凹みは、中央より外方向へ「殺し」を兼ねた調整を施した際に底内面の外側が盛り上がった結果とみることもできる。これらはおおむね13世紀代に比定されるものである。iii類（169・177・179～180）は、「均質手」、「北部系」と呼ばれる胎土の精良なものが多い。これらは、13世紀後半～14世紀代に比定されるものである。

小皿は量的には極めて少なく、図示し得たものは1点のみである。182は比較的直線的に外傾する体部のもので、13世紀代に比定される。

鉢も小皿同様に量的には極めて少なく、図示し得たものは1点にとどまる。185は口縁部がわずかに外反し、端部が肥厚し、端面に沈線様の凹みが一条巡っている。13～14世紀代に比定される。

b. 常滑窯産の壺・甕類

壺・甕類は、いずれも常滑窯産と考えられるものである。胴部片が多く図示し得るもの



第13図 遺物実測図(6) (1:4)

は少ない。183・184は、壺・甕の底部片である。ただ183については胎土から見て猿投窯（東山窯）産の可能性をもつものである。

c. 瀬戸・美濃窯産の施釉陶器

瀬戸・美濃窯産のものは量的には少ないが比較的器種に富んでいる。186・187は瀬戸窯産の灰釉盤で口縁部の形態より14・15世紀代に比定される。188・189は瀬戸・美濃窯産の天目茶碗で16世紀代、190～193は所謂長石釉のかかる瀬戸・美濃窯産の皿類で同じく16世紀代に比定される。194・195は灰釉皿で底部内面に印花が見られる。16世紀代。198～200は、瀬戸・美濃窯産の鉄釉揃鉢の口縁部片、16世紀代に位置づけられる。ここではこれらの施釉陶器について瀬戸・美濃窯産のものと考えた。両窯の区別については、今後の課題として置きたい。

F. 「中世土器」

灰釉陶器（山茶碗）ないし「伊勢型鍋」の出現以後、室町時代末にいたる時期の「土器」を便宜的に「中世土器」として一括する。量的には少ないが、器種としては、所謂「伊勢型鍋」,「羽釜」,「茶釜形」及び小皿が見られる。前二者については細片で図示し得ないが13～14世紀代のものがみられる。204は茶釜形の口縁部片。ただ双耳鍋の可能性もある。この茶釜形は、当遺跡周辺では16世紀代に出現するものである。

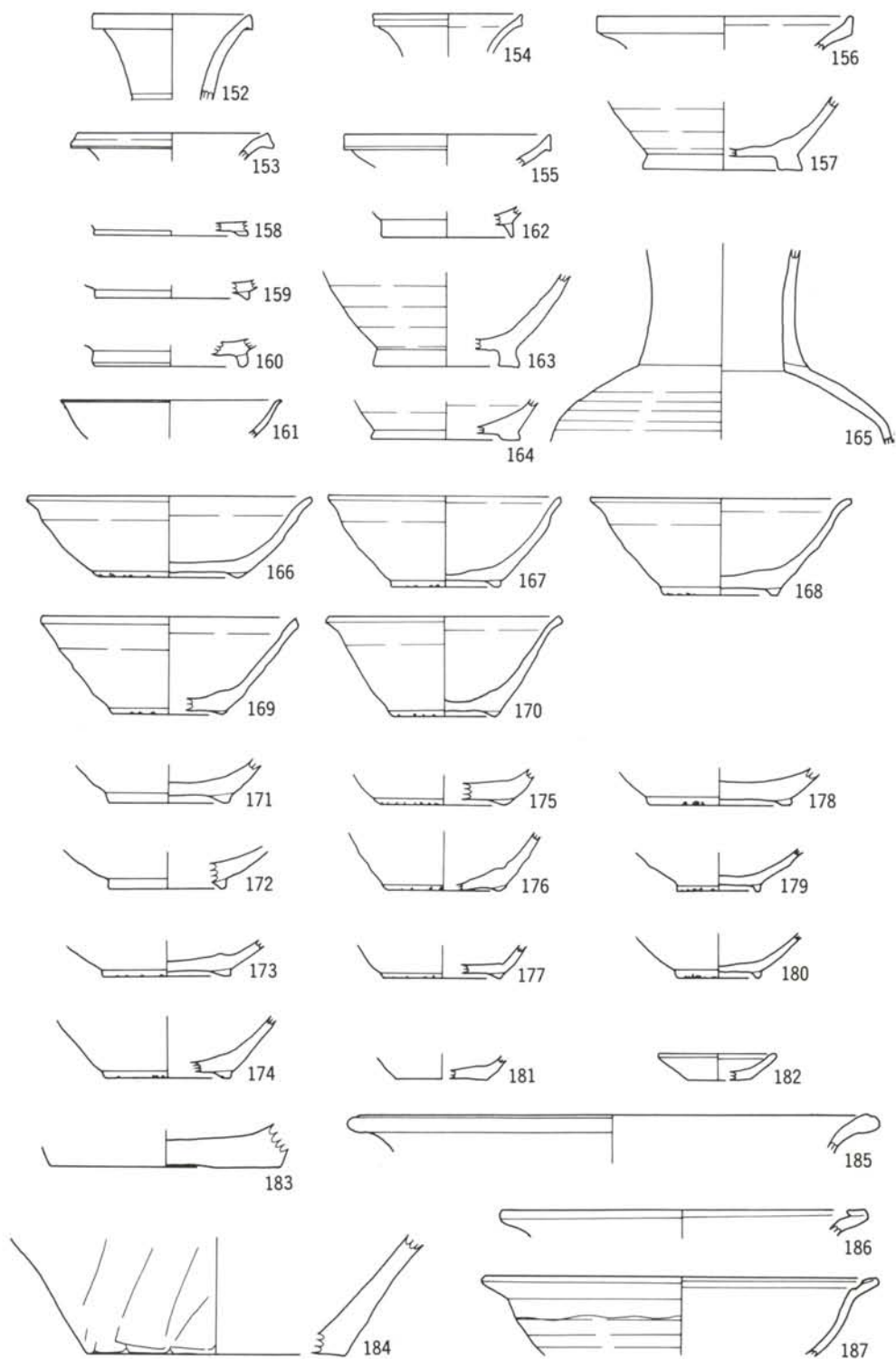
205～207は、内面及び口縁から体部にかけての外表面をヨコナデ調整し、底外面が未調整の小皿。隣接する阿弥陀寺遺跡の環状2号線用地内での調査所見よりすれば、14世紀代に比定されるものである。

G. 中国製磁器

中国製磁器は総計で5点ほどみられた。図示し得たものは208～210であるが、いずれも青灰白色乃至暗緑（褐）色の釉調を呈す。208及び209は画花蓮弁紋碗の胴部、210は同底部片である。時期は特定し得ない。

H. 土 鍾

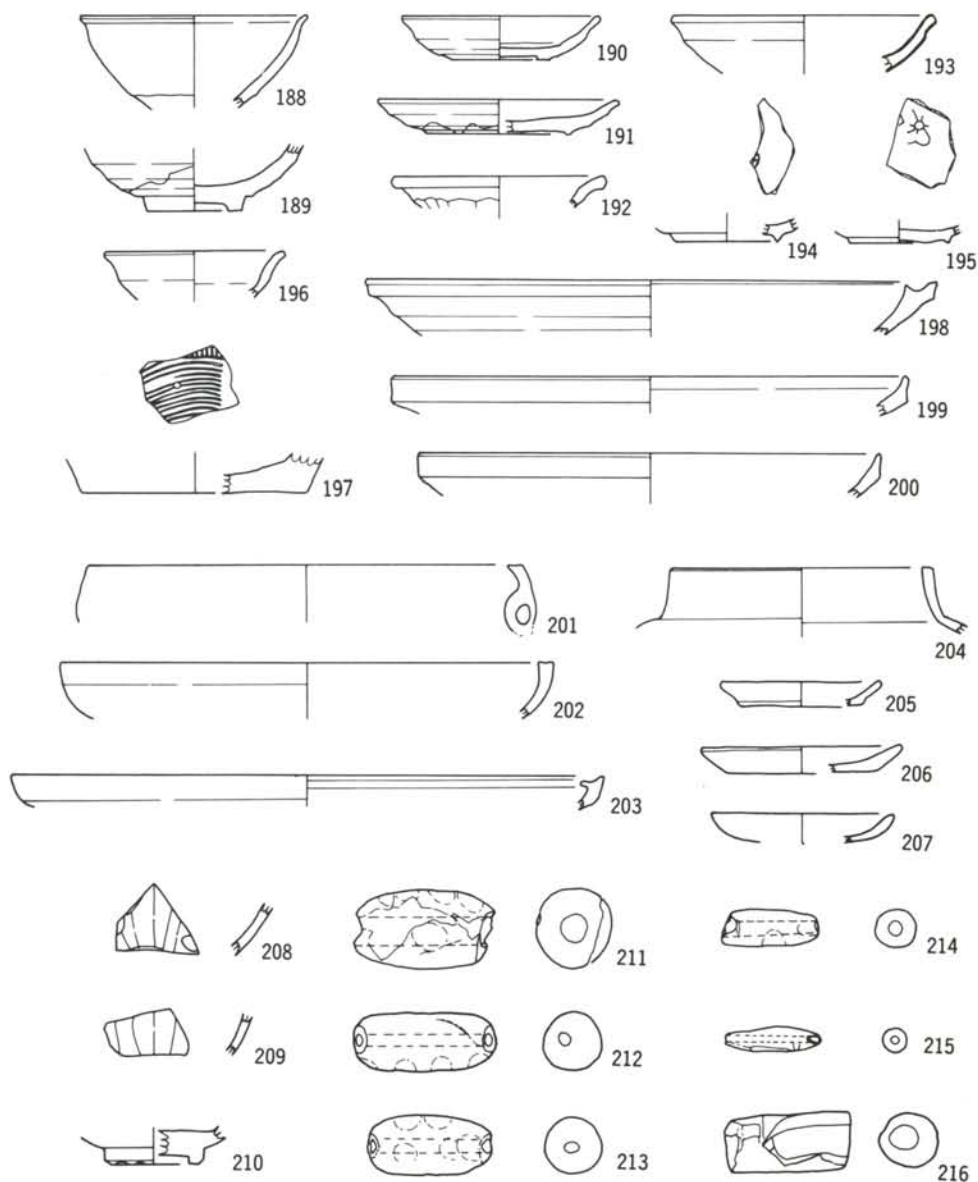
総計で8点ほどみられた。図示し得たものは6点である。大きさは総じて、211～213・216と214・215に分られるが、前者については211～213と216とでは胎土等は類似するが、製作手法において異なる。すなわち211～213は棒状のものに粘土を巻き付けて1個体ずつ造作していると考えられるのに対し、216は板状の粘土帯を棒状のものに巻き必要な長さに分断している、という相違である。また後者については、214と215では215が赤褐色に焼き上がり比較的精良な胎土であるのに比べ、214は211～213・216と同様と胎土で、褐色に焼成されている点で異なっている。こうした製作手法、胎土の相違が何に起因するか定かではない。また時期は特定し得ない。



第14図 遺物実測図(7) (1:4)

1. 漆・木製品

SX01の第IV層中より若干数の漆製品および木製品の残欠が出土した。いずれも遺存状態が悪く図示し得ないが、漆製品は、内面を赤く、外面を黒く塗った碗が3点および、赤黒の漆で「花」柄を描いた板状の残欠がみられた。木製品は、いずれも角材・板材で、器種等を特定し得ない。



第15図 遺物実測図(8) (1:4)

J. 石製品

図示し得ないが石製品は、「磨石」、「砥石」類が若干数出土した。

S X02出土遺物

弥生土器、須恵器、灰釉系陶器碗（山茶碗）がみられる。弥生土器及び須恵器については、図示し得なかったが、弥生土器は第8図9に近い形状の口縁部片（高蔵式）である。須恵器は、高台の杯身の底部片（時期を特定し得ない奈良～平安時代）で、各々1点ずつである。灰釉系陶器碗（168）は、体部が直線的に外傾し、口縁部がヨコナデによって外反する形態のもので、底内面に「殺し」が施されている。13世紀代に比定される。176も168と同様の体部を有すると考えられるもので、168に比べ底部と体部との境界が明瞭となっている。181は高台のみられない底部片で、176に比べ底径が小さい、高台は剥離した可能性もある。

小 結

今回の調査では、その大半が旧福田川の河道および谷状の落ち込み（S X01）であり、顕著な遺構はみられなかったが、旧福田川の開削時期等について新たな知見を得るにいたった。なお、当初想定した弥生時代の遺構は認められなかった。

旧福田川の開削時期については、その護岸の構築物とS X01との“切り合い”関係からみて、17世紀初頭以降であると推察された。これは、江戸時代のはじめの頃に開削されたという所伝と、はからずも一致することになった。

ただ、ここで注意しておきたいのは、S X01とした谷状の落ち込みの性格についてである。すなわち、S X01の埋積土は層状堆積を示しており、可能性として旧福田川の前身とみる立場も成り立ち得るということである。このことを支持する材料としては、S X01の埋積層中より、環状2号線用地内での大洲遺跡の調査では認められない時期の遺物が出土していることがあげられる。そしてその場合には、S X01の上端部に「護岸施設」は認められなかったことから「自然流路」であった可能性が生じてくる。

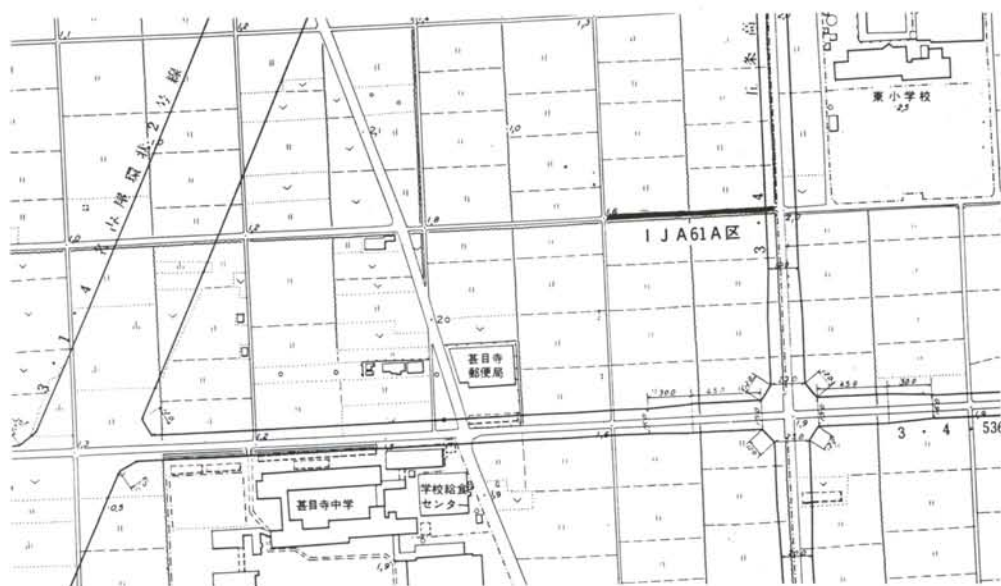
2. 阿弥陀寺遺跡（IJA 61 A地点）の調査

調査地は、愛知県海部郡甚目寺町役場の北東約400m、愛知県海部郡甚目寺町大字新居屋と大字甚目寺との大字界の農道部分である。調査区は、この農道下に用水のためのパイプラインを埋設する工事に伴う事前調査であるため、巾3.0m、長さ120mの極めて細長なものである。東西に長い調査区をほぼ二分する位置に南北方向の用水路が走っており、便宜的にこれを境にその以西を「西区」、以東を「東区」とよび区別した。発掘は、まず農道盛土以下、旧水田耕作土・床土までを重機により掘削し、以下人力で掘り下げるという方法で行なった。ただ調査区は併行する埋設物（ガス管）及び水路の護岸の保護のため調査区の中を底面で1.5mほどに削減した。

調査に際しては、西方0.3km地点の環状2号線用地内での知見から、(1)弥生時代の遺構の拡がり一なかんづく環濠集落の東限の把握—および(2)鎌倉・室町時代の遺構の拡がりについての把握を調査の課題とした。

基本的層序

調査区の基本的層序は、西区と東区とでは若干様相を異にしていた。すわなち、西区の基本的層序は、上から農道盛土、第二次世界大戦時の飛行場建設に伴う整地土層、旧水田耕作土・床土、黒褐色粘質土、暗灰褐色シルト質土、灰褐色シルト質土、暗青灰褐色粘質



第16図 調査区（IJA 61A）位置図（1：5,000）

土…の順である。遺構は、旧水田耕作土・床土直下で鎌倉、室町時代の遺構（上層遺構）が、黒褐色粘質土直下で弥生時代の遺構（下層遺構）が検出された。

東区では、上から農道盛土、第二次世界大戦時の飛行場建設（昭和19年～20年）に伴う整地土層、旧水田耕作土・床土、黒褐色粘質土ブロック混りの暗灰褐色粘質土、黒褐色粘質土、灰褐色シルト質土、暗青灰褐色粘質土…の順である。遺構は、旧水田耕作土・床土直下で鎌倉～室町時代の遺構（上層遺構）が、黒褐色粘質土ブロック混り暗灰褐色粘質土層下で時期不明の土坑が検出されたものの、黒褐色粘質土下では、遺構は認められなかった。なお、この黒褐色粘質土は、西区で薄く、東区で厚い堆積を示す。換言すれば、下層遺構の基盤をなす灰褐色シルト質土は西区で高く、東区で低くなっているということである。また、東区でみられた黒褐色粘質土ブロック混りの暗灰褐色粘質土は、黒褐色粘質土が人為的に攪搬された所産の可能性がある。

遺 構

検出された遺構は、検出面の層位から大きく上層遺構、下層遺構の2つに大別される。

上層遺構（第18図上）

上層遺構には、溝1条（S D01）、土坑3基（S K01～03）がある。鎌倉・室町時代の所産と考えられるものである。

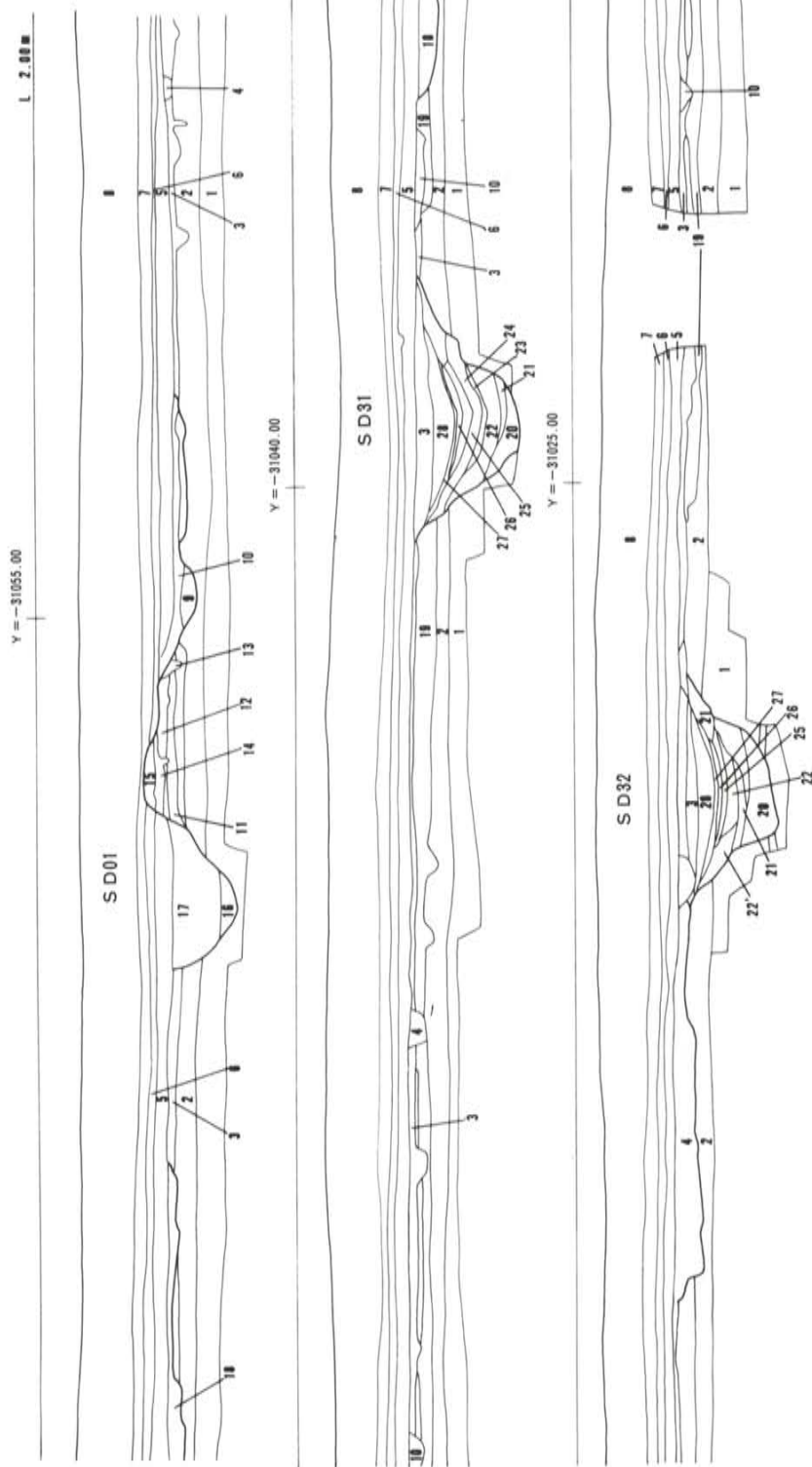
S D01 西区の西端より16m地点で検出された南北方向の溝。堀肩の西側に「堤」状の高まりがみられる。この「堤」は盛土によって構築されている。溝の埋土は（黄）灰褐色粘質土で、溝底に微細な炭化物がまばらにふくまれていた。

S K01 東区の西部、南壁面近くで検出されたため平面プランは明らかではない。埋土は、黒褐色粘質土ブロック（他の土坑埋土に比べブロックは小ぶり、拳手大）土である。

S K02 S K01に重複して検出。南北方向に長軸をとる長方形（推定）プランの土坑。断面は逆梯形状を呈す。黒褐色粘質土ブロック土（拳大～人頭大）を埋土とする。S K01により切られている。

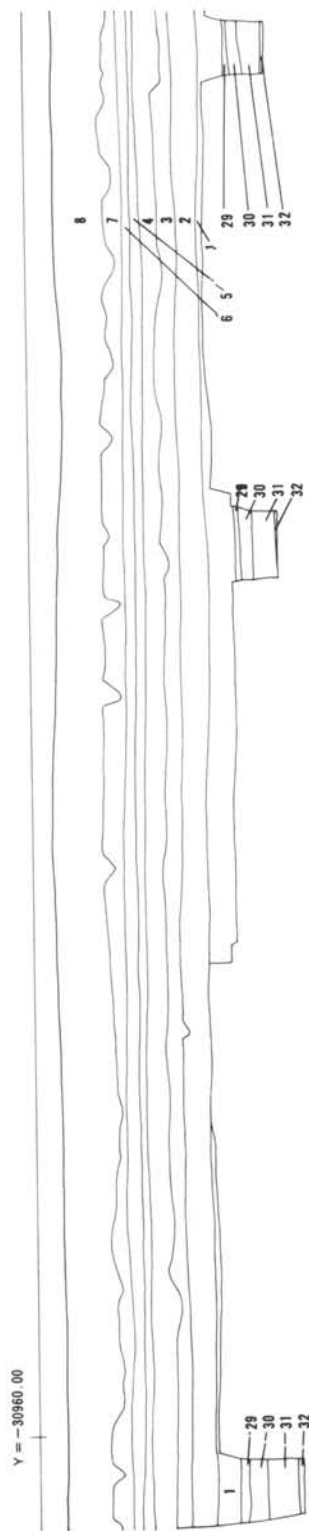
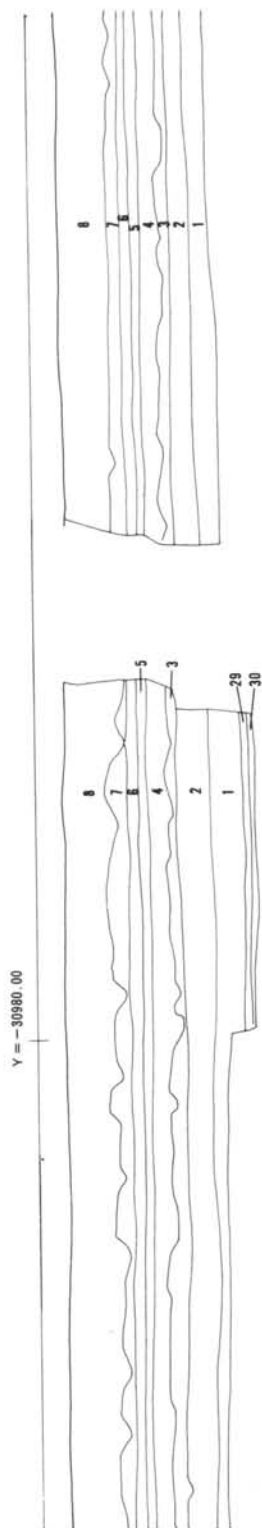
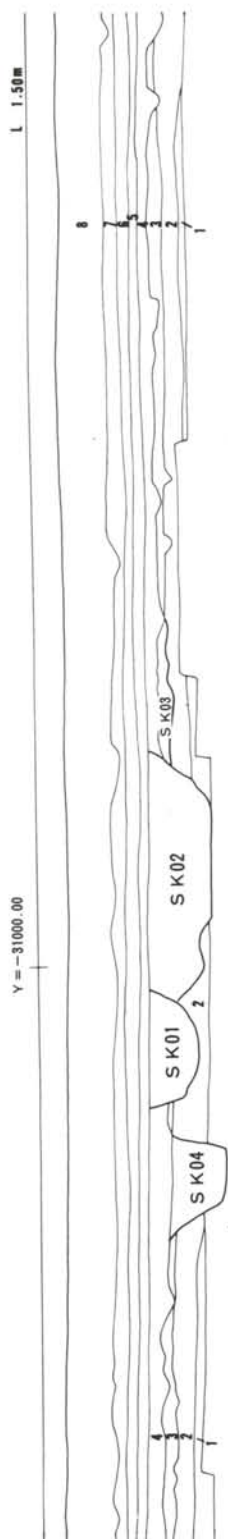
S K03 S K02により切られる正方形プラン（現状）の土坑。旧水田耕作土・床土直下の黒褐色粘質土ブロック混り暗灰褐色粘質土の下、黒褐色粘質土の上面で検出。床土直下では認められなかったが、黒褐色粘質土上で検出されたことからこのS K03は上層遺構に含めた。

S K04 南壁面のセクションで確認。発掘面で平面プランは確認し得ない。南壁沿いのトレンチ内で終結する土坑と考えられる。深さ0.4mで断面半円形を呈す。



第17図 I J A 61 A 区土層図 (1:80)

1. (黄) 灰褐色シルト質土 2. (青) 灰褐色シルト質土 3. 黒褐色粘質土 4. 黒褐色粘土ブロック混り暗灰褐色粘質土 5. 床土 6. 沈鉄層 7. 旧水田耕土 (第2次世界大戦直前まで) 8. 飛行場および道路 (現道) 建設に伴う盛土 9. 暗灰褐色土 10. 暗灰褐色粘質土 11. 暗灰褐色土 12. 黒褐色粘質土 13. 黒褐色土 14. 暗灰褐色粘質土 15. 明黄褐色土 16. 暗青灰褐色粘質土 17. 明 (黄) 灰褐色粘質土 18. 暗灰褐色粘質土 19. 暗灰褐色シルト質土 20. 暗 (青) 灰褐色粘質土 21. 黒色粘質土 22. 暗 (青) 灰褐色粘質土 23. 黒色粘質土 24. 暗灰褐色粘質土 25. 黒色粘質土 26. 暗灰褐色粘質土 27. 灰白色粘土 28. 黄灰褐色土 29. 黒色粘土 30. (暗) 青灰褐色粘質土 31. 暗青灰褐色粘質土 32. 青灰色砂



下層遺構（第18図下）

下層遺構には溝2条（SD31, 32）がある。いずれも黒褐色粘質土層直下で検出された弥生時代の遺構である。

SD31 西区のほぼ中央で検出。検出面で巾2.5m、深さ1.0mの断面略梯形状の東西方向の溝、西側斜面に巾0.2mほどのテラスがみられ、仔細にみると底面は東側斜面直下が最深となっている。

埋土は層状堆積をなすが、上層と下層とではその様相が大きく異なる。すなわち、上層の堆積は黒褐色粘質土と（黄）灰白色粘質土の互層（一種のラミナ層）からなり、基本層序で「黒褐色粘質土」としたものはその最上端の埋土にあたる。溝下層の堆積土は、上より暗（青）灰褐色粘質土→黒色粘質土（薄層）→暗（青）灰褐色粘質土となっている。下層を中心に弥生土器片が3点出土した。

SD32 西区、SD31より東方20mのところで検出。検出面で巾2.75m、深さ1.0m、断面略逆梯形状を呈する。埋土は層状堆積をなし、上記SD31とほぼ同様の様相を呈する。埋土中より弥生土器数片が出土。なお、このSD32を境いに、SD31, 32の基盤の灰褐色シルト質土は埋土の最上層をなす黒褐色粘質土とともに東方にむけて落ち込んでおりこのSD31, 32が微高地の縁辺近くに構築されたものであった蓋然性が高い。

出土遺物

今回の調査で出土した遺物には、弥生土器及び、灰釉系陶器の碗・皿類（山茶碗類）、瀬戸窯産の施釉陶器がある。量的にはいずれも少量である。

上層遺構の遺物（第19図）

SD01及びSK01の埋土中より若干数の遺物が出土した。

SD01 瀬戸窯産（愛知県瀬戸市周辺）の「折縁の灰釉盤」の口縁部片（1）が1点出土した。14～15世紀代に位置づけられる。

SK01 灰釉系陶器の小皿の小片（2）が出土。その形状から13世紀代に比定される。

そのほか「中世土器」の小皿の細片および灰釉系陶器碗片（北部系、均質手）がみられた。

SK02 弥生土器の小片（壺か）が1点出土。遺構の検出層位からみて、本遺構の形成時の



第18図 上層遺構出土の遺物（1：4）

ものとは考えられない。

SK03 いわゆる「中世土器」の小皿の細片が2点出土、時期は特定し得ない。

包含層等 そのほか、时期的に上層遺構に伴う遺物が、飛行場建設に伴う整地土層中より若干数出土している。13世紀代に比定される灰釉系陶器碗、14～15世紀代の瀬戸窯産の卸皿、天目茶碗片等である。搬土中よりの出土であり、もとより一帯に展開する阿弥陀寺遺跡のものか否かすら定かではない。

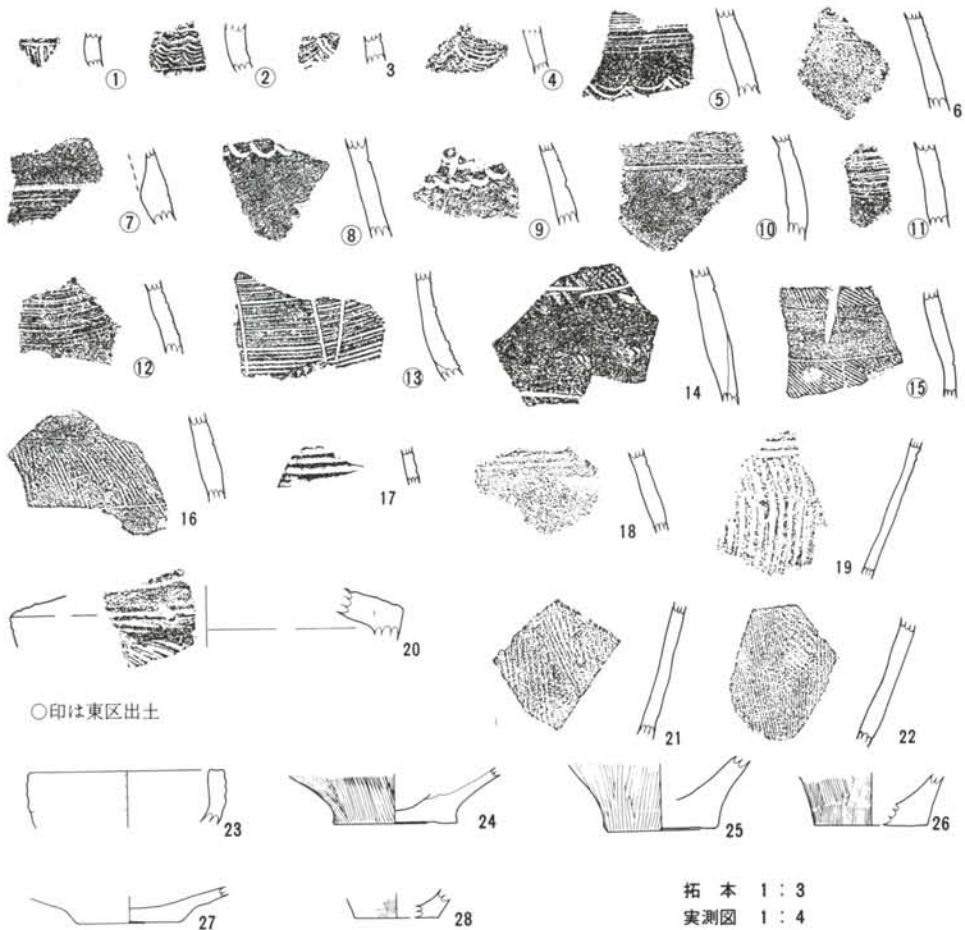
下層遺構の遺物（第20図）

SD31及びSD32の埋土及び下層遺構をおおう黒褐色粘質土、灰褐色粘質土（基盤）の上部より弥生土器が出土した。

SD31 図示し得ないが、外面ハケ目調整の甕片が1点出土。時期を特定し得ない。

SD32 外面ハケ目調整の甕片が2点出土（21・22）。時期を特定し得ない。

包含層出土 時期を特定し得るものとしては、貝田町式及び高蔵式のものが見られる。1

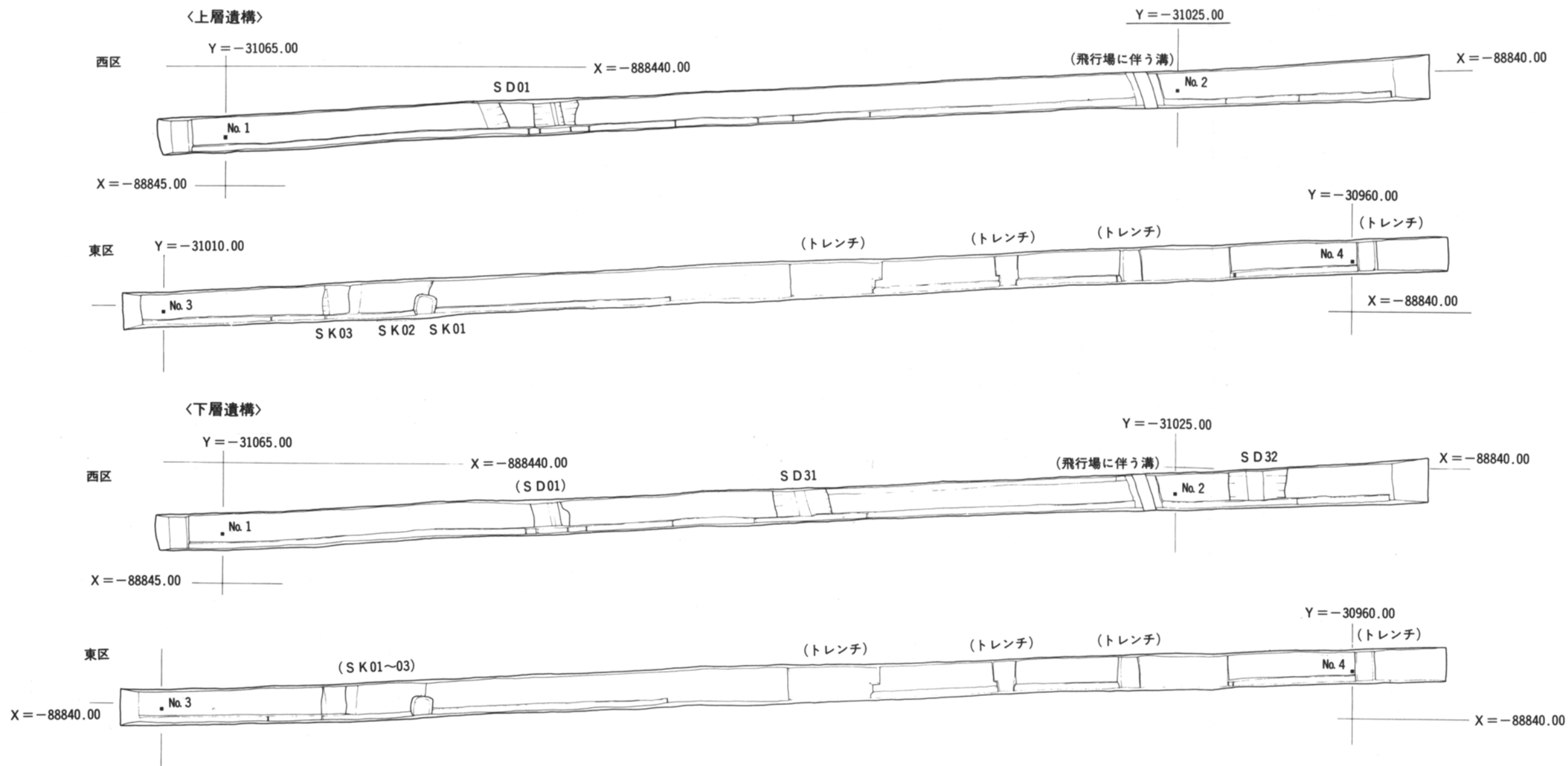


第20図 下層遺構出土の遺物

～18は壺の破片でその紋様、施紋手法からみて貝田町式に比定されるものである。14～17にみられるような紋様帯間を研磨する（研磨帯を紋様とする）施紋手法は、この時期に特徴的なものである。19の甕片にはその外面に所謂「たて羽状」の条痕がみられる。この小片から時期を限定することは出来ないが、おおむね貝田町期（乃至は高蔵期）として捉えられるものである。20の鉢は所謂「厚口鉢」とよばれるもので、外面に条痕が施されている。19の甕と同様に捉えられるもので貝田町期（乃至は一時期古い朝日式）所産と考えても差支えないものである。「高蔵式」のものとしては23の壺の口縁部片がある。23～28は壺・甕類の底部片である。24～28は平底の甕の底部片である。台がつかない点で「高蔵式」乃至それ以前のものの可能性が強い。

小 結

今回の調査で、弥生時代及び鎌倉・室町時代に中心をおく阿弥陀寺遺跡の拡がり、なかんずく環状2号線用地内で検出された弥生時代の環濠集落の東限および鎌倉・室町時代の方格地割の広がり の把握が主要課題であった。巾狭な調査区であったが調査の結果、弥生時代、鎌倉・室町時代の遺構ともに調査地点まで拡がりをもっていることが確認された。殊に、弥生時代の2条の溝S D31・S D32については、後述のように貝田町・高蔵期の環濠と推察される（後述）ものであり、環濠集落の東端捉えられ、その規模が推察されるにいたったことは、今回の調査の成果の第一としてあげられるものであろう。



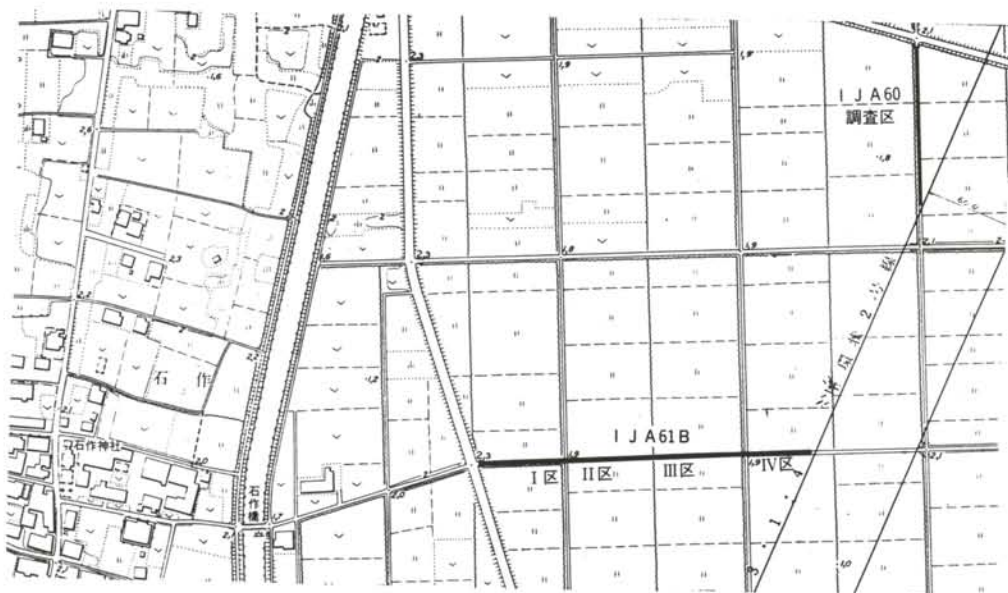
第19図 IJA61A区遺構図 (1:200)

3. 阿弥陀寺遺跡（IJA 61 B地点）の調査

調査地は、甚目寺町大字石作の石作神社前の東西方向の道を東へ約200mほどの農道部分である。地籍は、愛知県海部郡甚目寺町大字石作である。今回の発掘調査はパイプライン埋設工事に伴う事前調査で、調査区は巾2m前後、長さ270mときわめて細長なものであった。調査区の設定については調査区を南北方向に走る農道がほぼ等間隔で3ヶ所みられ調査区を4つに分断していたことから、便宜的に農道で以って調査区を4つに分ち、西よりI区、II区、III区、IV区と命名した。

調査に際しては、調査区東端の東南約100m地点の環状2号線用地内での調査所見より、(1)鎌倉・室町時代の遺構の拡がりの把握および(2)現福田川の川岸（調査地西端より西へ約150m）において弥生土器、土師器、須恵器等々が表面採集されていることから、当該時期の遺構の有無の確認を調査課題とした。調査の結果、鎌倉・室町時代の遺構については認められたものの、それ以前のものについてこれを確認するにいたらなかった。ただ、弥生土器が破片数点ではあるがI区の西部の黄灰褐色粘質土層の上部より出土したことは近くに弥生時代の遺構が存することを示唆しているものと考えられる。

調査は、農道盛土より旧水田耕作土、床土までを重機で掘削したのち人力で掘下げ遺構検出を行った。



第21図 調査区（IJA 61B）位置図（1：5,000）

基本的層序

調査地の基本的層序は、I・II区では上から農道盛土、飛行場建設に伴う整地土層、旧水田耕作土・床土、黄灰褐色粘土、黒褐色粘質土、灰褐色砂（質）土、暗（青）灰褐色砂、灰白色砂の順で黄灰褐色粘質土の上に黒褐色粘質土がまばらに残る地点もみられるが、おおむね既述のIJA 61 A地点西区と同様の層序であった。ただ、II区の東端からIII区、IV区の西部にかけては、旧水田耕作土の下で、黄灰褐色粘質土ないし黒褐色粘質土の上面にかけて一面に黒褐色粘質土ブロック混りの暗灰褐色粘質土層（後述SX01埋土）がみられ、先述のIJA 61 A地点東区の基本的層序と同じ様相を呈していた。

遺構はいずれも旧水田耕作土・床土乃至灰褐色粘質土・直下において検出された。

遺 構

検出された遺構は、溝4条（SD01～4）、土坑13基（SK01～14）である。そのほかにII区東端からIV区西部にかけて意味不明の落ち込み状遺構帯（SX01）がある。以下I～IV区の順で遺構について説明していく。

I 区

溝3条（SD01～03）、土坑9基（SK01～09）が検出された。

SD01 I区の西端近くで検出された巾1.0m、深さ0.3mほど南北方向の溝。断面は半円形条を呈す。埋土は、暗灰褐色砂質土。

SD02 I区の東部で検出された巾0.3m、深さ0.05mの浅い溝。溝の走行方位はN-10°-Eである。埋土は、暗灰褐色砂質土。

SD03 SD02の東3m地点で検出された巾1.0m、深さ0.2mほどの溝。断面は略半円形を呈す。形状・埋土はSD01と酷似する。SK08により切られている。

SK01 その殆どが調査区外となるためその形状等は明らかにし得ない。埋土は黄灰褐色粘質土および黒褐色粘質土のブロック土。

SK02 その殆どが調査区外となるが、検出部は隅丸の長方形プランのコーナーと思われる。埋土は基本的には層状堆積をなすが黄灰褐色粘質土、黒褐色粘質土、灰褐色砂（質土）のブロック土が混じる。その堆積状況からみて「溝」とすべきかも知れない。SK03を切っている。

SK03～05 巾1.3～1.5m、深さ0.15m前後で断面略長方形を呈する長方形プラン（南辺が調査区外となる）の土坑。いずれも類似した形状を呈し、加えて埋土もともに黄灰褐色粘質土および黒褐色粘質土の拳大ブロック土で層状堆積ではなく、掘削直後に埋戻したが如き様相を呈している。SK03とSK04の間（中心間）が4.5m、同じくSK04とSK05間が

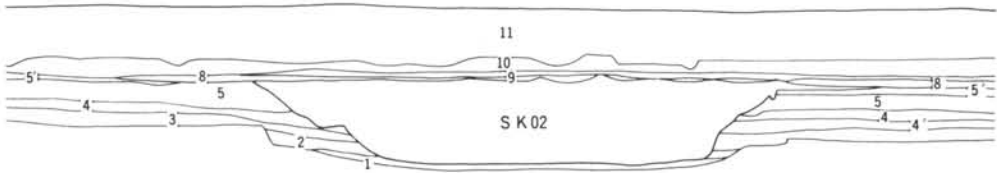
4.5mと同一であり、その配列に何らかの「計画性」の存在が予想される。しかし、例えば埋土中に柱穴等の痕跡等は認められず、その性格は不明である。

S K 06 S K 05の東3.0m(中心間)のところで検出された土坑。埋土、形状ともS K 03～05に類似するが、プランが幾分隅丸となっている。間隔が異なるもののS K 03, 04, 05の直線延長上にある点が注目される。

S K 07 S K 06によって切られているが位置的にはほぼ重複する。埋土、形態はS K 03～05・06に類似している。

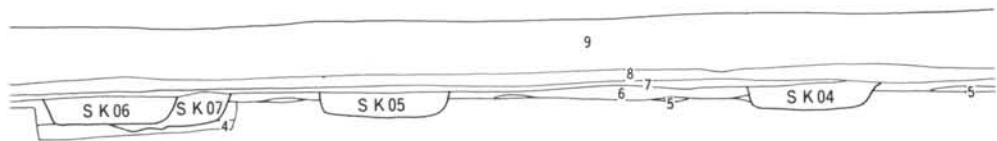
〈I区 北壁面〉

L=200M



〈I区 南壁面〉

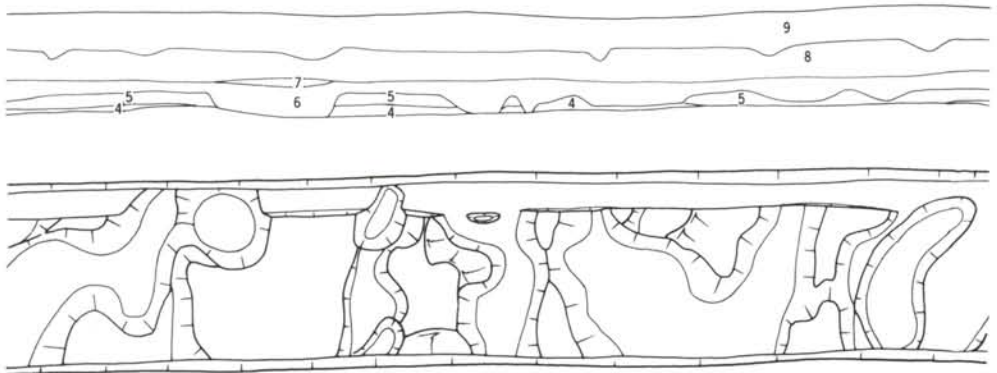
L=200M



- | | | |
|------------|--------------------|------------------------|
| 1 灰白色砂 | 5 黄灰褐色粘質土 | 9 床土 |
| 2 暗(青)灰褐色砂 | 5' 黄灰褐色土 | 10 旧水田耕土 |
| 3 灰褐色砂質土 | 6 5・4層のブロック土 | 11 盛土(第2次世界大戦時の飛行場建設等) |
| 4 黒褐色粘質土 | 7 暗灰褐色土(5・4のブロック混) | |
| 4' 暗灰褐色粘質土 | 8 暗灰褐色土 | |

〈IV区 北壁面〉

L=200M



第22図 I J A61B区土層図(1:80)

S K 08 S K 07の東 8.5m (中心間) のところにある土坑。断面形が「半円形」をなす点 S K 07などと異なるものの埋土は類似する。S D 03を切っている。

S K 09 I 区の東端で検出された土坑。西南辺のコーナーが検出されたものの、東、北辺が調査区外にあたる。土坑の規模は確認されたところよりすれば、長軸を東西方向にもつ長方形プランで上端 $2.5\text{m} \times (2.5\text{m} + \alpha\text{m})$ 底面 $0.65 \times (1.0 + \alpha\text{m})$ 、深さ2.0m。埋土は、層状堆積をなさず、黄灰褐色粘質土、黒褐色粘質土、灰褐色砂(質)土、拳大のブロック土混りの暗灰褐色粘質土で、あたかも掘削された直後に埋戻されたが如き様相をなす。

II 区

溝 1 条 (S D 04)、土坑 1 基 (S K 10) がみられた。そのほかに飛行場関係の溝 (コンクリート。滑走路の側溝か)、戦後の溝各 1 条がみられた。

なお、II 区の東端より後述の S X 01がみられるが、これについては、III 区の項で記すこととする。

S D 04 巾1.0m、深さ0.05mの浅い溝である。底面は凹凸をなし、遺構というよりはたんなる凹地の可能性もある。埋土は黒褐色粘質土。

S K 10 II 区の中央やや西よりの地点で検出。北辺1.5mほどの方形プランの土坑と推察されるが、南辺が調査区外となるため詳細については明らかにできない。断面は略逆梯形を呈す。埋土は拳大の黄灰褐色粘質土および黒褐色粘質土のブロック土。

III 区

II 区の東端からIV 区の西部にかけて、黄灰褐色粘質土、黒褐色粘質土のブロック土の攪搬土層が旧水田耕作土、床土の直下、黒褐色粘質土にいたる間に展開する。これは、黄灰褐色粘質土、黒褐色粘質土が何らかの力により攪搬されたものと考えられる土層である。この土層を取り除くと第22図に示すような様相を呈す。「何らかの力」を人為、例えば耕作と想定した場合、攪搬に規則性が見出されない点が若干疑問として残る。ここではとりあえず S X 01として扱い、その性格の解明等については今後の課題としておきたい。なお、この S X 01は、IJA 61 A 地点の東区においてみられた「黒褐色粘質土ブロック混りの暗灰褐色土層」とほぼ同一の性格のものと考えられる。とすれば、きわめて広範にみられることとなり、場合によっては、「自然」の営力による所産の可能性も考えられることになろうか。

IV 区

IV 区の遺構には、その西部に上述の S X 01がみられるほか、土坑が 4 基 (S K 11~14) がある。

S K 11 径0.6m、深さ0.3mほどの略円形プランの土坑。断面は略半円形を呈し、埋土は黄灰褐色粘質土、黒褐色粘質土の拳大のブロック土。

S K 12 長さ1.0mほどの楕円形プランの土坑。埋土は灰褐色粘質土で層状堆積をなす。

SK13 IV区の東端で検出。方形プランの土坑の一辺か。埋土は黄灰褐色粘質土、および黒褐色粘質土の挙大のブロック土。

SK14 IV区の東端より西へ10mほどのところで検出された長さ2.5m、深さ0.3mのだ円形（隅丸方形）プランの土坑。埋土は黄灰褐色粘質土・黒褐色粘質土・灰褐色砂（質）土のブロック土。

出土遺物

出土遺物には、弥生時代から江戸時代にいたる各時期のものがみられる。そのうちの殆どは飛行場建設に伴う整地土層より出土したもので、遺構あるいは旧水田耕作土・床土下よりの包含層出土遺物は、総計で100点にみえない。

以下、遺構に伴うものについて記し、飛行場建設に伴う整地土層中出土の遺物については、これを省略する。

I 区

SD01 弥生土器（あるいは土師器か）の甕片2点、灰釉系陶器碗（山茶碗）が1点出土。これは口縁部片で、その形状から13世紀代に比定されるものである。

SD03 図示し得ないが、時期等を特定し得ない土器片が1点出土。

SK02 いずれも細片であるが、弥生土器片9点、灰釉系陶器碗・小皿片5点、加工円盤1が出土。図示し得た小皿（2）は、所謂「均質手」のもので、14世紀後半～15世紀代に比定されるものである。1の加工円盤は、13世紀代に比定される山茶碗の底部片（高台部分）の四周を打ち欠いたものである。

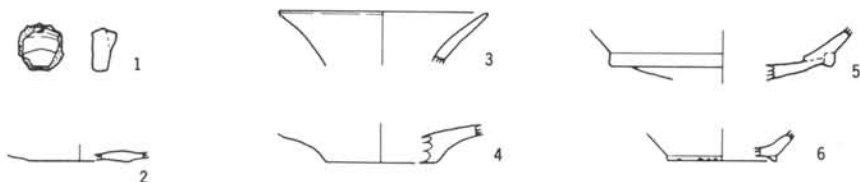
SK04 時期を特定し得ない土器の細片が1点出土。

SK05 灰釉系陶器碗の胴部片が1点出土。その形状から12～13世紀代に比定されるものである。

SK07 弥生土器の小片が1点出土。

SK08 弥生土器細片が1点、灰釉系陶器碗片が3点みられた。灰釉系陶器碗片3点のうち2点は所謂「均質手」のものである。14世紀代に比定される。

SK09 時期を特定し得ない土器片1点、鎌倉・室町時代（厳密には、それ以後の可能性もある）の所謂「中世土器」の小皿が2点、灰釉系陶器碗片2点が出土。



第24図 遺物実測図（1：4）1・2 SK02 3～6は各区包含層

包含層出土 I区の西部、基本層序の(5)の直下より弥生土器が1点出土。壺の胴部片で「櫛描文」様の沈線帯から「貝田町式」に比定される公算が高いものである。東南方向の環状2号線用地内で検出された弥生時代の集落と関連するものか、あるいは西方の福田川の掘削時に弥生土器が出土していることから、そのあたりに集落が存したことに起因するものか定かではない。

II区

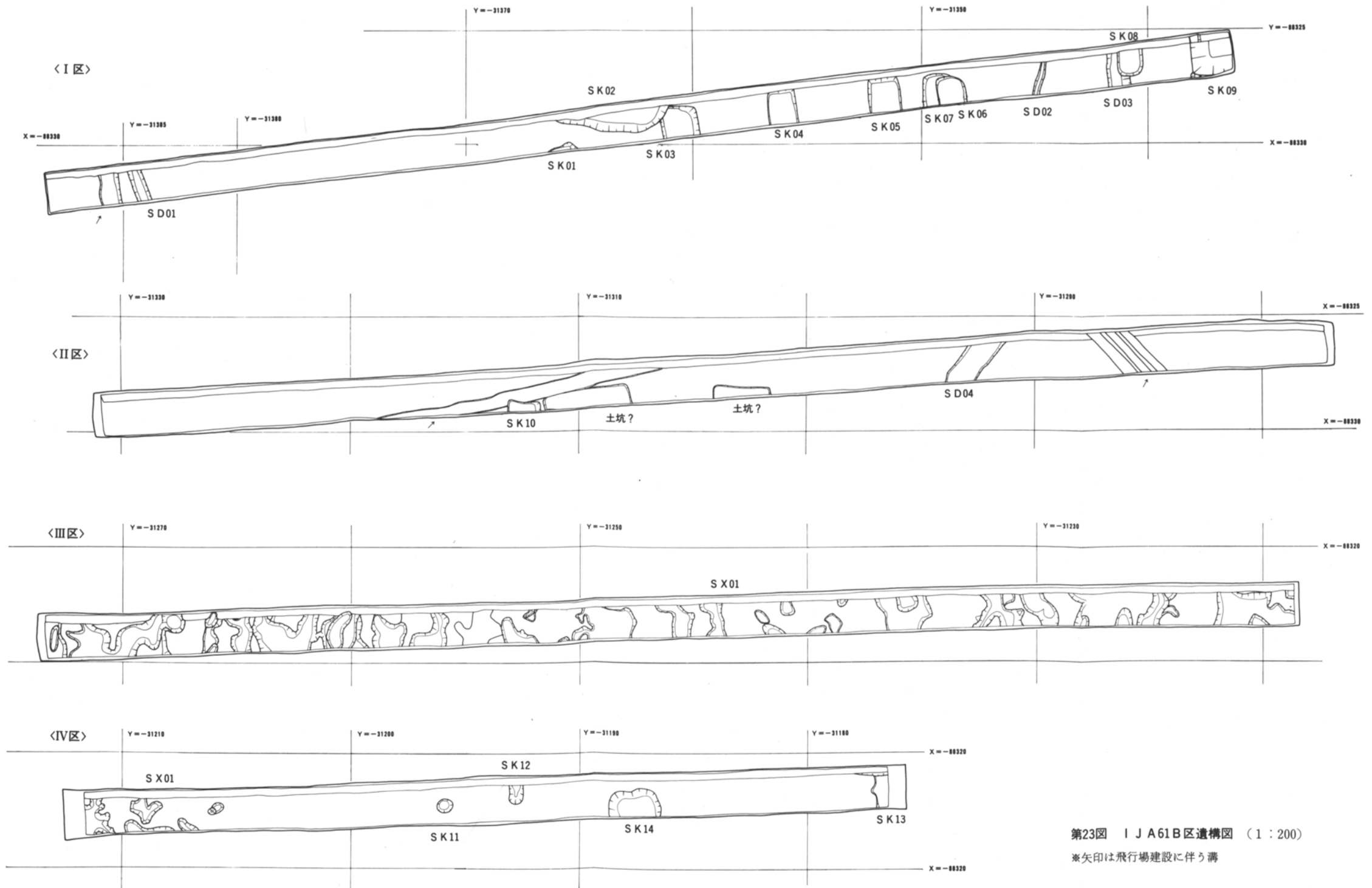
SX01 図示し得ないが、弥生土器片が3点出土。

III・IV区

遺構に伴って出土したものはない。

小 結

今回の調査の成果としては、第1に隣接する土田遺跡（西春日井郡清洲町）において多数検出された「方形土坑」が、旧福田川をはさんだ対岸の調査地点において検出され、従来かかる「方形土坑」の検出されなかった阿弥陀寺遺跡においても、土田遺跡同様に「屋敷地」群の沿辺に「方形土坑」が展開する公算が高まったことがあげられよう。第2に、環状2号線関連で調査した土田遺跡と阿弥陀寺遺跡の調査区の間にあたる調査地点で、南北・東西方向を軸方位にも溝が検出されたことがあげられる。すなわち、かかる溝は、調査区地の土田遺跡、南の阿弥陀寺遺跡において多数検出されており、直接の連続、非連続はともかくとしても、このような南北・東西を基調とする区割、両者が一連のものである可能性が強い。このような一種の「方格地割」が、少なくともこの時期にかなりの広がりをもって展開していたことが伺われ、当地方における地割制度のみならず土地開発等の問題を考える上で重要なデータを提供することができたものと考ええる。



第23図 IJA61B区遺構図 (1:200)

※矢印は飛行場建設に伴う溝

III 自然科学的分析

「中世土器」の胎土分析（重鉍物）

今回の発掘調査に関連して、土器の胎土分析（重鉍物）をバリノ・サーヴェイ株式会社に依頼して実施した。以下はその分析報告である。

課題と試料

課題：分析にあたっては、阿弥陀寺遺跡、大洲遺跡及びその周辺遺跡出土の「14世紀代」の土器を主たる分析対象とし、器種と胎土の関係を明らかにし、土器の「流通」等を考える上での資料づくりをすることを分析の第1の課題・目標とした。これは、所謂「伊勢型鍋」、「羽釜」が愛知県下においてはほぼ同一形態を示すのに比べ小皿類は形態のバリエーションに富むという従来の知見をふまえてのことである。

試料：試料は、上述のように阿弥陀寺遺跡、大洲遺跡出土の土器及び比較資料として隣接する遺跡出土の土器を対象とした。試料の年代はいずれも「14世紀代」、この年代観は主に灰釉系陶器碗（山茶碗）から導き出されたものである。なお、阿弥陀寺遺跡、大洲遺跡の試料については、今回の調査区出土のものは破片が小さく、これを分析試料とした場合、今後サンプルとして不十分となるおそれがあるということから同一遺跡ということで、環状2号線用地内の調査区出土のものでこれに換えたものが多い。試料の番号、遺跡名、器種等については第2表に示した。

分析方法

分析方法については、次のとおりである。土器片約10gを鉄乳鉢にて粉碎、水を加え超音波洗浄装置により分散、#250の分析篩を用いて水洗、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後篩別し、得られた1/4~1/8mmの粒子をテトラブromoエタン（比重約2.96）により重液分離、重鉍物のプレバート作製、偏光顕微鏡下にて同定した。

不透明鉍物については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものをAとし、それ以外をBとした。表中の「その他」は、変質等で同定不能の粒子である。

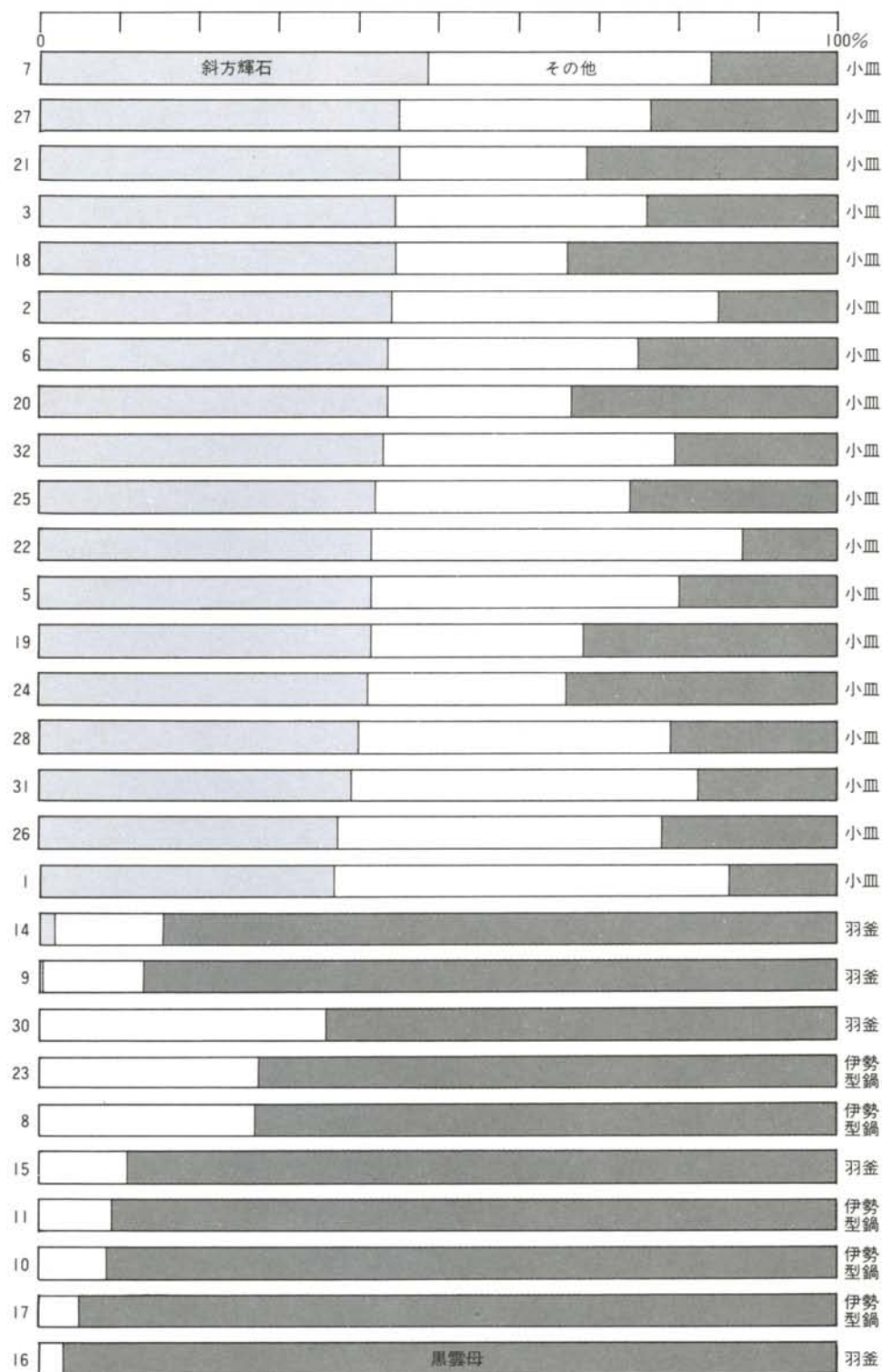
第2表 分析試料一覧表

No.	遺跡名	調査区遺構	器種等	時期	表面の色（表・裏）	表面の質感	備考 出土年月日
1	朝日西	59F S D08	小皿	14C	浅黄橙・同	きめ細か	850313
2	〃	59F S D08	〃	〃	〃 〃	〃	850302
3	〃	59F S D08	〃	〃	〃 〃	ややきめ細か	850313
5	森南	J T 5 S D08	小皿	14C	浅黄橙・同	やや粗い	831201
6	〃	J T 5 S D08	〃	〃	〃 〃	〃	831201
7	〃	J T 5 S D08	〃	〃	〃 〃	〃	831201
8	〃	J T 5 S D07	伊勢型鍋	〃	にぶい橙色・黒色	粗い・岩片を多く含む	831202
9	〃	J T 5 S D07	羽釜	〃	浅黄橙・同	〃	831124
10	阿弥陀寺	61VIIH 6-g S D03	伊勢型鍋	〃	にぶい橙色・浅黄橙	粗い・岩片を多く含む	E-155 860521
11	〃	61VIIH 5-i S D03	〃	〃	灰褐・浅黄橙	〃	E-156 860521
12	〃	60CVI16-j S X03北西部	〃	15C	褐灰・灰褐	きめ細か	E-368 850823
13	〃	61 4-i S D02上	羽釜	14C末	淡灰褐・灰褐	〃	E-18 860507
14	〃	61 3-g S D02上	〃	14C	灰褐・同	〃	E-30
15	〃	61VIIH 5-i S D03	〃	〃	にぶい黄橙・同	粗い・岩片を多く含む	E-89 860521
16	〃	61VIIH 5-i S D03	〃	〃	灰白・浅黄橙	粗い・雲母・岩片を多く含む	E-84と同型 860521
17	〃	61VIIH 5-i S D03	伊勢型鍋	〃	灰褐・にぶい黄橙	粗い・岩片を多く含む	E-80 860507
18	〃	60CVI12-r S D03下層	小皿	〃	浅黄橙・同	きめ細か	F-205 850828
19	〃	60C S D03下層	〃	〃	灰白・同	やや粗い	
20	〃	60CVI10-o S D03下層	〃	〃	〃 〃	きめ細か	E-219 850802
21	〃	60CVI12-o S D03下層	〃	〃	〃 〃	〃	E-2206と類似や や厚手 850802
22	〃	60C12-g S D03	小皿	〃	浅黄橙・同	〃	E-2206と類似や や厚手 850802
23	〃	60C12-o S D03上層	伊勢型鍋	〃	にぶい黄橙・灰褐	粗い	
24	〃	60C12-o S D03下層	小皿	〃	灰白・同	きめ細か	E-287 850802
25	〃	60C12-o S D03下層	〃	〃	〃 〃	〃	850802
26	〃	60C12-o S D03上層	〃	〃	浅黄橙・同	やや粗い	E-253 850802
27	〃	60C12-p S D03	〃	〃	〃 〃	〃	850726
28	〃	60C12-o S D03下層	〃	〃	灰白・同	〃	E-258 850802
30	〃	60AIV12-b S D05下層	羽釜	〃	浅黄橙・同	粗い・雲母多し	E-85
31	〃	60AVI15-b S D05上層	小皿	〃	灰白・浅黄橙	やや粗い	E-92 850530
32	大洲	IJO6I IIIE 9-e S X01IV層	〃	〃	浅黄橙・同	〃	861120
33	〃	60D10-h S D04	伊勢型鍋	12C末	にぶい橙・褐灰	粗い・岩片を多く含む	850711

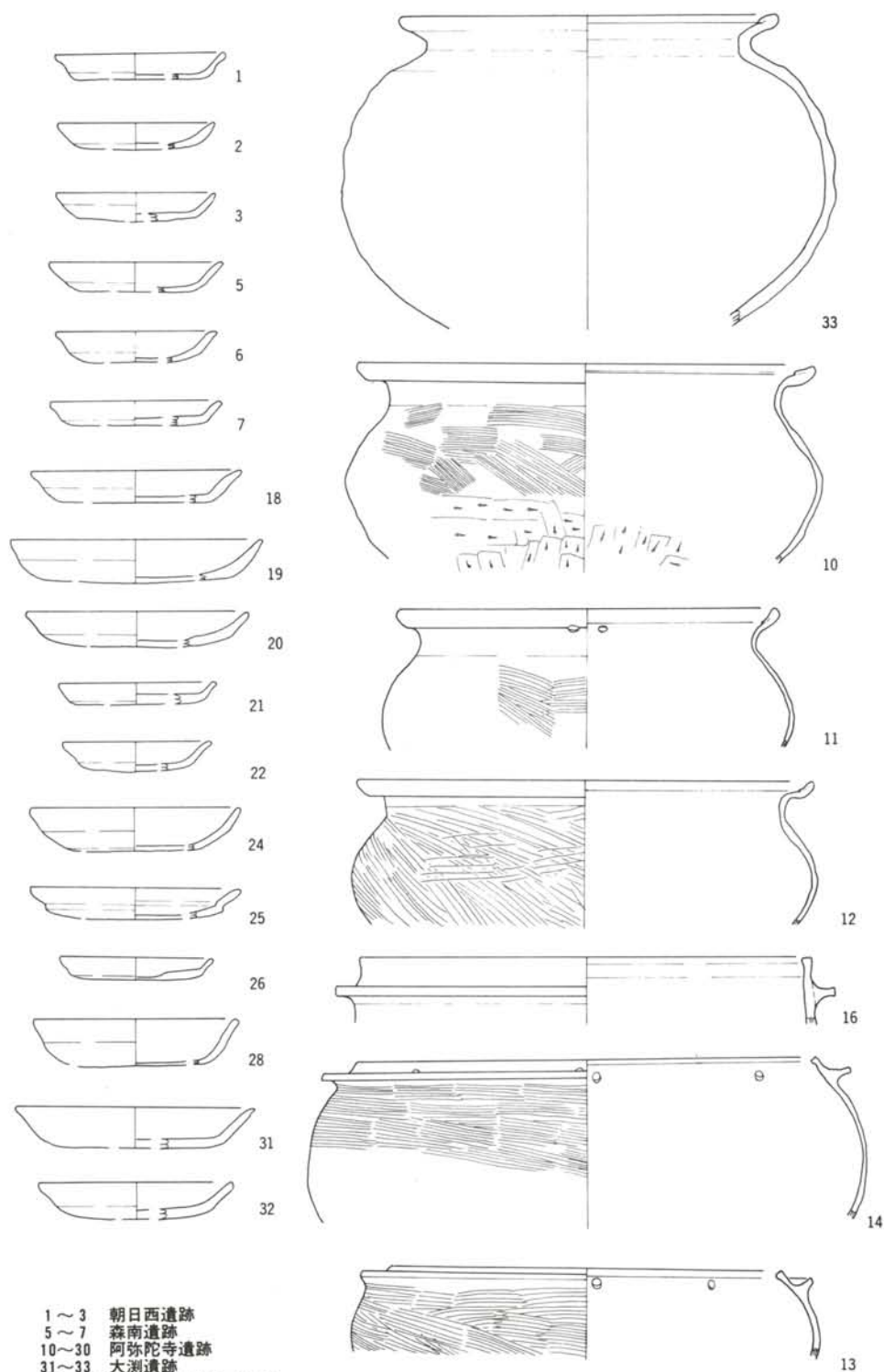
第3表 阿弥陀寺遺跡(福田川整備関連)試料 胎土重鉱物組成

試 料 番 号		重　　鉱　　物　　組　　成															同 定 鉱 物 粒 数	
		カ ン ラン 石	斜 方 輝 石	単 斜 輝 石	角 閃 石		酸 化 角 閃 石	他 の 角 閃 石	黒 雲 母		緑 レ ン 石	ジ ル コ ン 石	ザ ク ロ 石	リ ン 灰 石	不 透 明 鉱 物			そ の 他
					緑 色	褐 色			褐 色	緑 色					A	B		
朝 日 西	1	6	65	15	6	16			6	18					11	13	20	176
	2	2	117	27	38	2		1	7	33		1			14	9	14	265
	3		90	28		9			5	42					4	8	16	202
森 南	5		75	17	17				7	29					10	10	15	180
	6		95	14	3	11			11	44		1	1		1	17	21	219
	7		72	17	8					24		2			9	7	10	149
	8			15	6				17	165		5			1	11	30	250
	9		1	7	3				13	206		2			1	1	17	251
阿 弥 陀 寺	10			3	4			1	20	151		1	1				6	187
	11			2	2	1			69	169			1	1		5	11	261
	12	1	1	1					8	10			1		1		2	25
	13			1					51							206	3	261
	14		4	5		1			132	27		2	2		1	1	13	188
	15			2					16	208		2				3	20	251
	16			2					130	113		2	1			2		250
	17								54	183	2	1				1	9	250
	18		112	35	6	2			2	84		1	1		4	2	3	252
	19		104	36		9			2	79		2				8	12	252
	20		42	8	3	2			2	30		1			1	5	2	96
陀 寺 大 洞	21		84	19	4	1			3	56					4	1	15	187
	22		105	38	2	31			3	33			1		13	9	19	254
	23			14	6	1			14	157	3	1				7	33	236
	24	1	101	27	7	1			1	82		3			2	10	10	245
	25		105	27	15	3	5			65			1		9	1	18	249
	26		39	19	6				1	22					4	12	1	104
	27		124	36	4	4	5		4	60	2					15	21	275
	28		102	25	12	6	15		1	53		2	2		2	17	18	255
	29		41	3	13		1					4	1		128	6	13	210
	30			8	22	1			6	134		7			4	19	17	218
	31		75	29	19	1				34					12	6	17	193
大 洞	32		110	29	2	14			1	51		1	1		9	16	20	254
	33			6	20	1	1			4		40	1		3	161	13	250

※ 数値は全て粒数



第25図 重鉱物組織



第26図 遺物実測図(1:4)

分析結果及び考察

分析結果：分析の結果，得られた試料の重鉱物組成は第3表，第25図に示すとおりである。

処理後に得られた重鉱物の粒数が100粒に満たないものが，Na12，Na20の2点みられた。このうちNa20は100粒に近いので，ほぼ正しい組成を表しているものと解した。またNa12については，重鉱物の含有量が少ないことに意味がある可能性がある（後述）。

試料のグループ分け：分析結果をもとに，その重鉱物組成における共通する特徴をとらえ，以下のような試料のグループ分けを行った。

I グループ（Na.1～7，18～22，24～28，31，32）

斜方輝石が最も多く，次に黒雲母，単斜輝石，角閃石の順に多い（Na12は角閃石が単斜輝石をやや，うわまわる）グループ。

II グループ

黒雲母が非常に多いことで特徴づけられるグループ

（単独グループ）

Na13…不透明鉱物Bが非常に多く，他に黒雲母が含まれる。

Na33…不透明鉱物Bが多い点はNa13に似るが，他の試料に較べてジルコンの量が非常に多いことが特徴である。

Na12…同定鉱物粒数が25と極端に少ない。少ないなかでも黒雲母が18をしめる。この点ではIIグループに近い。

土器の器種と胎土との関係：上記のように試料は，重鉱物組成の特徴により比較的明瞭なグループ分けができるが，このグループと器種との間にさらに明瞭な対応関係を認めることができる。（第25図）

すなわち，Iグループは全て小皿類，IIグループはいずれも「伊勢型鍋」と「羽釜」，単独グループは，14世紀代の前，後の時期に「伊勢型鍋，羽釜」という対応である。このことから14世紀代に限って云えば小皿類と鍋，釜類とでは「土（素地）」が異なっていたことが考えられる。また，鍋，釜について云えば，例数が少ない点で不安は残るが時期によって「土（素地）」が異なって（変化して）いる可能性がある。

製作地の問題等：ここでは，こうした成果をふまえ，製作地の問題について若干の検討を加えてみたい。まずこのような胎土と器種との対応関係から次のことが考えられる。すなわち，小皿類と鍋釜類とでは，

- i) 製作地が異なる。
- ii) 土器の用途により土（素地）を選択していた。

iii) 形態により土(素地)を選択していたこと等々が考えられる。

i) について言えば、例えば器種により産地が異なっていた(あるいは産地を選択して購入していた)ことや、例えば1つの生産地で製作する器種の分担が決められていたことなどが考えられる。ii) について言えば小皿類と鍋釜類とでは、耐火性を考慮して異なる土(素地)を使っていた可能性が考えられ、iii) については、製作時の成形過程などにおける作り易さを考慮して異なる素地を用いていたことなどが考えられる。ただ、先述したように、「伊勢型鍋」、「羽釜」が愛知県下においてほぼ同一の形態を示すのに比べ、小皿の形態がバラエティに富んでいるという所見が正しいとするならば、同一場所で両者が製作されたという可能性は弱まろう。もし同一場所で製作されていたとするならば、小皿類の形態が画一的である可能性が高いと考えるからである。なおこの場合、i) 製作地が異なる理由としてii), iii) が考えられよう。

胎土変化の問題：今回の分析では「14世紀代」に比定される土器を中心に試料を選択したが一部、鍋・釜類については、12世紀末葉及び15世紀代の「伊勢型鍋」、15世紀初頭の「羽釜」の分析を行なった。分析試料の絶対数が少ないが、次に年代と胎土の変化について若干言及してみたい。

伊勢型鍋についてみると、

- ①12世紀末……不透明鉱物Bが非常に多いほか、ジルコンの量が多いという特徴をもつ。
- ②14世紀代……黒雲母が非常に多いという特徴をもつ。
- ③15世紀代……重鉱物粒数が極端に少ない

という具合に整理される。単純化をおそれずに言えば、この順で「伊勢型鍋」は年代とともに胎土変化したということになろう。この結果は、はからずも隣接する土田遺跡(清洲町)での胎土分析(重鉱物)結果をまとめた赤塚次郎氏が設定した第1段階～第3段階に①～③が対応しており、例数が少ないものの土田遺跡での分析結果を追証し得たことになる^註。

以上、胎土分析の結果について若干の考察を加えてみたが、いずれも仮説の域を出ない点も多い。いましばらくより多くの遺跡での分析結果の蓄積をまちたいと考える。

註 (財)愛知県埋蔵文化財センター1987『土田遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第2集)

この章は、バリノ・サーヴェイ株式会社の依頼報告書を基に、編者が一部組替等を行ない、主として考察の部分について加筆を行ないまとめあげたものである。

IV 考 察

1. 阿弥陀寺遺跡周辺の弥生時代遺跡の立地について

1

既述のように阿弥陀寺遺跡の周辺は、第2次世界大戦時の飛行場建設および戦後の開墾水田化という経過から、往時の地形は大きく改変をうけていた。そこで遺跡の立地を考えるために、昭和13年作成の『愛知県海部郡甚目寺町土地宝典』を原図とし、畑地、屋敷地を微高地として捉え、これを抽出する方法で微高地の展開を中心とした旧地形の復元を試みた。その作業の過程で、阿弥陀寺遺跡のみならず周辺の弥生時代遺跡の立地について、特徴的な分布状況が把握されたので、以下、弥生時代遺跡の立地の一事例としてここに紹介したい。

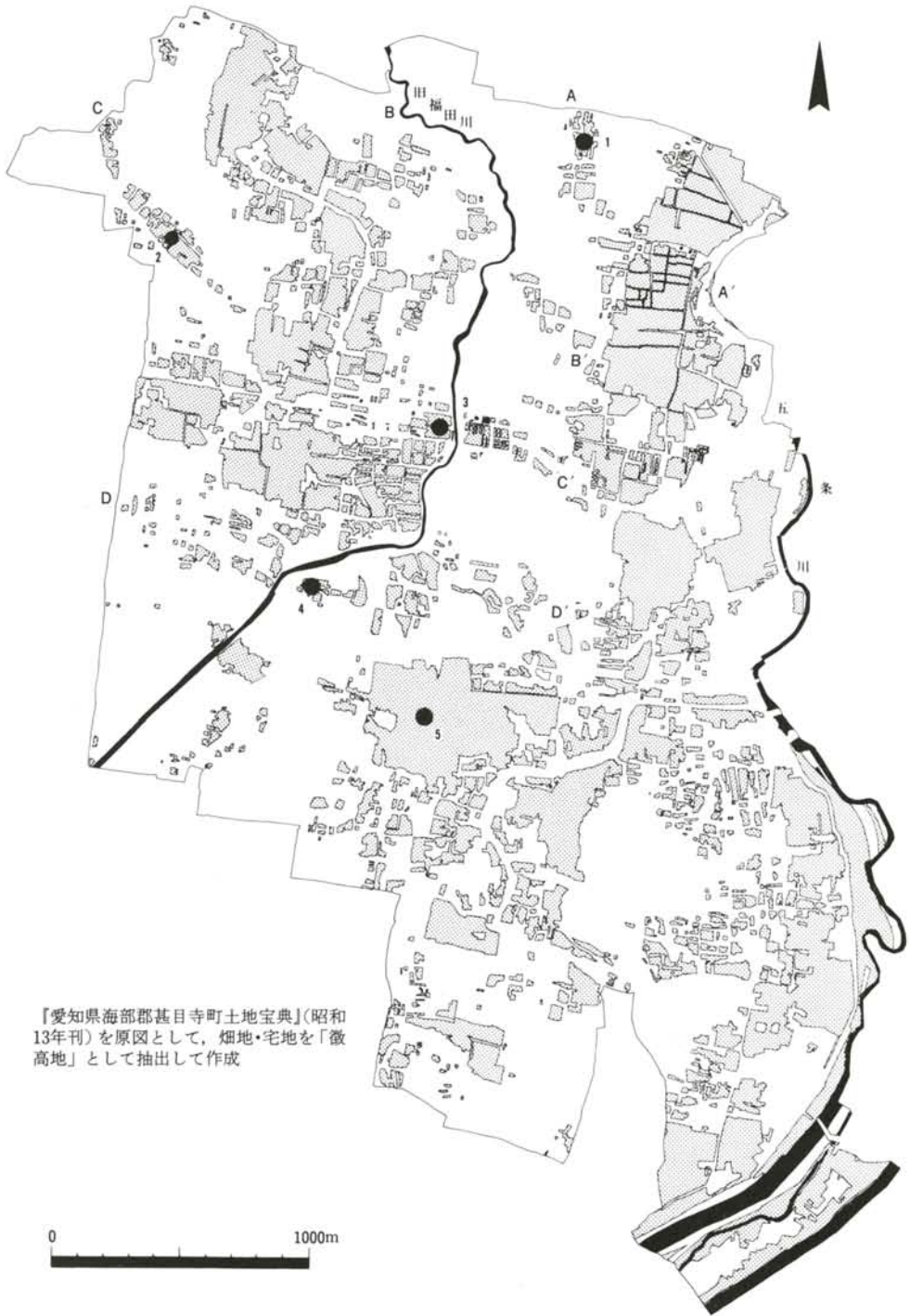
2

上記の作業により作成したのが、第26図である。図の示すところによれば、現五条川、福田川の流路方向一南北一に沿って大型の微高地（自然堤防）が展開し、その間を方向を異にするA-A'、B-B'、C-C'、D-D'（以下A～D帯）で示した北西から南東方向に走る「小規模な微高地の帯」が幾条も認められ、しかもこれらA～D帯は、ほぼ平行関係にある。といった状況が看取される。

このA～D帯と弥生時代遺跡の分布を重ね合わせると、A帯に土田遺跡、C帯に森南遺

第4表 阿弥陀寺遺跡周辺の弥生時代遺跡

No.	遺 跡 名		土 器 型 式	(西志賀)	朝 日	貝 田 町	高 藏	山 中	欠 山	備 考
1	土 田	愛知県西春日井郡清洲町							○	
2	森 南	愛知県海部郡甚目寺町					○	○		
3	阿 弥 陀 寺	〃		(△)	○	○	○			
4	大 洲	〃					○			
5	(甚 目 寺)	〃								磨製石斧



第27図 旧地形復元図

跡、阿弥陀寺遺跡、D帯に大洲遺跡という具合に、弥生時代遺跡のいずれもがこの帯上に立地していることが知られる。このことは、この帯状の微高地上が弥生時代における人々の生活拠点であったことを示すと考えられる。とともに、現在みられる大規模な自然堤防の形成は弥生時代以降であることを示しているともいえる^註。

しばしば指摘されるように、現在の自然堤防の分布をもとにした弥生時代の集落の立地の検討には少なからず問題があることを再認識したものと考える。

3

次に、弥生時代遺跡が立地するこの「小さな微高地の帯」が如何なるものか、少し検討しておきたい。井関弘太郎氏によれば、「……中島郡（稲沢市）と海部郡との境界線の南側に沿って、ほぼ東西に走る旧砂堆地形の埋積していることが上述原〔原賢仁1978—筆者〕の研究によって判明してきたが、そのような上部砂層面の微高部が当遺跡地点（朝日遺跡—筆者）およびそれ以東にまで、若干の埋没浅谷によって切断されていることがあるにしても、大局的には連続しているらしいこと、そして、その微高部に甚目寺町（海部郡）の阿弥陀寺遺跡（主に弥生後期）をはじめ、土師器をもつ遺跡群が数多く分布しており、そうした遺跡配置の一環として朝日遺跡の立地も考えられるようになってきたのである。（井関弘太郎1982）という。上述の「小規模な微高地の帯」は、位置的にみて埋積している旧砂堆地形の頂部の痕跡の可能性が大である。したがって、かかる事例は、井関氏が想定する基本的な枠組から逸脱するものではなく、新たな知見とまではいかないものであるが、今後尾張平野の弥生時代遺跡の分布を論じる際の布石となり得るものと考え、あえてここに紹介した次第である。

註 昭和63年度、本センターが実施している清洲城下町遺跡の調査（清洲東小学校近辺、五条川右岸の大型の自然堤防上）では、奈良時代末（折戸第10号窯式期）の遺構面上に約1mほどの砂の堆積がみられた。

参考文献

- 井関弘太郎 1982 「朝日遺跡における旧自然環境の復元と考察」（『朝日遺跡』愛知県教育委員会）
 原賢仁 1978 「濃尾平野における後期完新世の地形発達と先史遺跡の立地」（名古屋大学文学研究科修士学位論文）

2. 阿弥陀寺遺跡の環濠集落について

1

今回の阿弥陀寺遺跡61A区の調査では、遺跡の東部へいわばトレンチが入ることになり、環状2号線建設用地内で検出されている弥生時代の環濠集落¹⁾の東方への広がりをつかむことが、調査課題の1つとなった。

調査の結果、既述のように、弥生時代の溝2条（S D31, 32）が検出されるとともに、この2条の溝を貝田町・高蔵期の「環濠」の延長と想定するにいたった。

そこで、ここではその根拠となった点及び問題点について若干の整理をしておくこととしたい。

2

61A区で検出された平行するS D31・32の形状等については既述のとおりであるが、ここで問題となるその特徴等について再度まとめておく——。

- ① この2条の溝は、埋土の堆積状況が酷似していることから、ほぼ同時期に埋没したものと考えられる。
- ② S D31, 32の掘削されている基盤は、東方にうつるにつれて標高が低くなっている。
換言すれば、S D32は、微高地の縁辺近くに掘削されている。
- ③ 埋土は、大きく上、下の二層に分けられ、とくに埋土上層は、黒色粘質土と灰白（黄白）色粘質土の互層よりなっている。
- ④ 黒色粘質土と灰白（黄色）色粘質土の互層は、S D32以東の低い部分の埋積土と一致している。

といった諸点があげられる。

環状2号線建設用地内で検出された「環濠」の詳細については、正式報告書の作成をまちたいが、概要報告のなかでもふれられているように、上記は環状2号線内で検出された貝田町・高蔵期の「環濠」の特徴と概ね一致している²⁾。こうしたことから、今回の調査で検出されたS D31及びS D32を貝田町・高蔵期の「環濠」の延長にあたるものと想定するにいたったわけである。

3

ただ、ここで問題となる点としては、今回の調査によるS D31・32からは、弥生土器の

出土はみたものの、甕の破片であり、時期を確定し得ない点である。ここでは、上述のように貝田町～高蔵期以外の時期に比定される弥生土器の出土をみなかったという消極的な理由から、貝田町・高蔵期の所産のものと考え、貝田町・高蔵期の「環濠」の延長と想定したわけであるが、この点で疑問は残る。

このほか、この2条の溝について「環濠」以外のものの可能性も生じる。たとえば「方形周溝墓」の可能性については、一辺が22mをこえるものとなり、朝日遺跡（西春日井郡清洲町）の調査所見からすれば、規模に比べ溝があまりにも貧弱となる。この点を重視し、この可能性については取り下げた。

以上、疑問点も残るが、推察されるところの環濠集落の範囲を示せば、第28図のとおりである。

これにより復元される規模は、長径で360m、短径で240mをはかる。ちなみに、この大きさは、朝日遺跡の貝田町・高蔵期のいわゆる北の環濠集落³⁾とほぼ同一大となり、別の意味で興味深いが、いまは指摘をするにとどめておきたい。

註

1) 環状2号線用地内での調査結果については、下記の「阿弥陀寺遺跡」の項を参照されたい。

既往の調査では、貝田町・高蔵期および山中期の「環濠」が検出されている。

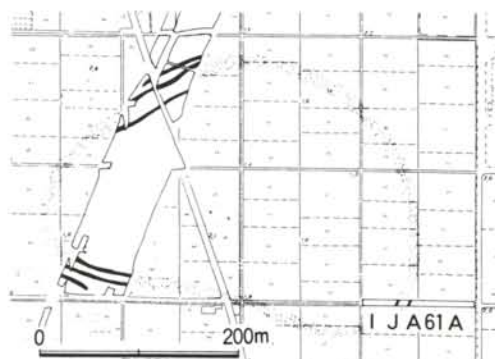
愛知県教育サービスセンター 1983～85 『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ～Ⅲ』

愛知県埋蔵文化財センター1986『年報 昭和60年度』

愛知県埋蔵文化財センター1987『年報 昭和61年度』

2) 註1の文献参照

3) 註1の愛知県埋蔵文化財センター 1987の「朝日遺跡」の項を参照。



第28図 環濠集落概念図（貝田町・高蔵期）

3. 結 語

以上、福田川整備事業に伴う、大淵遺跡、阿弥陀寺遺跡（および方領遺跡一付載一）の調査成果について、数項に分ちて述べてきた。いずれも巾狭な調査区ではあったが、それぞれにおいて概ね所期の目的を達成し得たものとする。すなわち、今回の大淵遺跡の調査では、遺跡の北限の様相および旧福田川の開削（厳密には護岸工事）時期を把握することができ、阿弥陀寺遺跡の61A区（下層）では、弥生時代（貝田町・高蔵期）環濠集落の東限が捉えられ、また、同遺跡61A（上層）・61B・60調査区（および方領遺跡）では、少なくとも13～14世紀代にさかのぼる溝（走行方位を東西・南北にとる）、「方形土壇」が検出され、当該期の土地開発の進行状況等を知る手掛りが得られた。殊にこれらの調査地点は、当センターが環状2号線（一般国道301号）建設に伴う事前調査として実施した大淵、阿弥陀寺、土田遺跡の周辺にあたるものであり、これらの調査との関連からすれば、今回の調査は、遺跡周辺の当該期の様相を具体的に復元する上できわめて有意義なものであったと考える。

付 載

1. 阿弥陀寺遺跡（I J A60地点）の調査結果

調査地は、I J A61B調査地点の北東約200mの地で、環状2号線（一般国道302号線）に接して南地に走る農道下である。

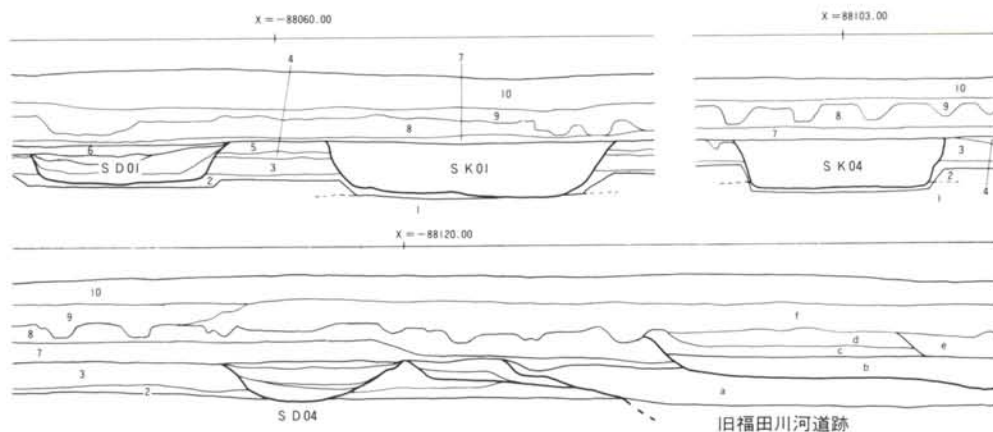
調査は、県教委文化財課教育主事（加藤安信）の指導のもとに、甚目寺町教委により、昭和61年2月にかけて実施された。

基 本 層 序

調査地の層序は基本的に上から農道盛土、飛行場建設（昭和19年）に伴う整地土層、旧水田耕作土・床土、暗灰褐色土層（部分的）、暗灰褐色粘質土、黒褐色粘質土、黄灰褐色土、黒（褐）



第29図 位置図（1：5000）



第30図 I J A60土層図（1：80）

1. 青灰色粘（質）土 2. 黒褐色粘（質）土 3. 黄灰褐色シルト質土 4. 黒褐色土 5. 暗灰褐色粘質土
6. 暗黄灰褐色粘質土 7. 床土 8. 旧水田耕土 9. 茶褐色土（飛行場建設に伴う整地土） 10. 現水田耕土および農道盛土 a～f. 旧福田川河道埋立て土

色粘質土、青灰色粘質土の順である。暗灰褐色粘質土以下は無遺物層であり自然堆積層と判断されるものであって調査地の基盤と考える。遺構はいずれも床土乃至灰褐色土層の直下において検出された。

遺 構

検出したおもな遺構としては、溝4条(S D01～04) 土坑10(S K01～S K10)がある。これらの遺構の時期区分については、S D01～03, S K02から室町時代に比定される遺物がごく少量出土したにすぎないため、厳格にはこれを特定し難いが、「方形土坑」(後述)についての土田遺跡での調査所見(助愛知県埋蔵文化財センター1986「年報」)より、総じて鎌倉～室町時代の所産と推察される。

そのほかに昭和初期の流路変更及び昭和19年の飛行場建設により埋立てられた福田川の旧河道跡がみられた。

以下、溝、土坑、旧福田川河道跡の順で遺構の所見について記す。なお調査区の制約から規模等が判明しないものが多い。

溝

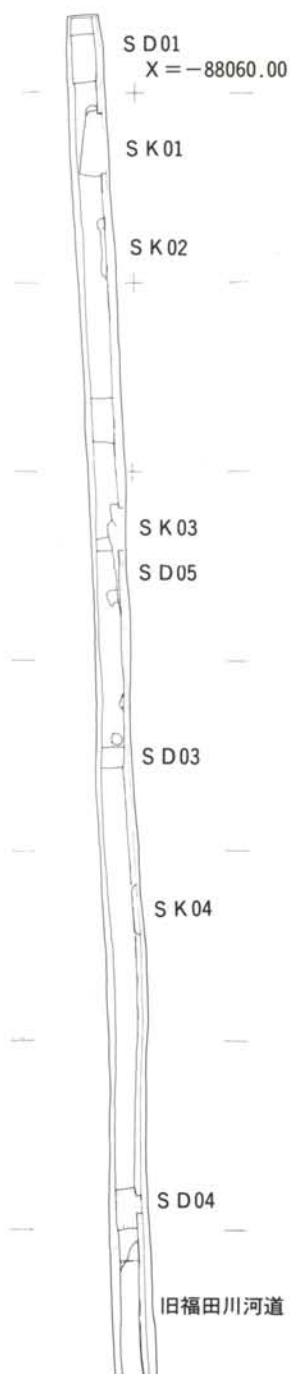
大別して東西方向(S D01～04)のものと南北方向(S D05)のものに分けられる。

S D01 発掘区の北端で検出された東西方向の溝。上端巾2.5m, 下端巾で2m, 深土は南側で0.5m, 北側で0.4mをはかる。埋土は層状堆積をなすが、基盤土(上述)のブロック(拳大～人頭大)が多量にみられ、土坑の可能性もある。

S D02 S D01の南約20mほどのところで検出された東西方向の溝。規模は上端巾2.5m, 下端巾1.7m, 深さ0.7mをはかり断面は逆梯形状を呈する。埋土は層状堆積を示すもののS D01と同様に基盤土のブロックが比較的多くみられる。

S D03 S D02の南約1.7mのところで検出された東西方向の溝。上端巾1.3m, 深さ0.3mで断面略半円形状を呈す

Y = -31105.00



Y = -31105.00

第31図 I J A 60遺構図
(1:400)

る。埋土は層状堆積で二者に比べブロック土の混入が少ない。

S D04 S D03の南24mのところで検出された東西方向の溝。上端巾2.3m、深さ0.5mで断面略半円形状を呈する。埋土は層状堆積で流水状況を示している。

S D05 S D02, S D03間で検出された南北方向の溝。発掘区の制約から深さ0.5mほどであることが知られるにすぎない。北端部（或は東方へ直角に曲るか）は西辺に対して北辺が直角をなしている。またこの北端部にはこのS D05に直交して西方に向う巾0.7m、深さ0.1mほどの小規模の溝が接続している。なお、S D05はS K03を壊して掘削されている。

土 坑

S K01 S D01の南で検出された南北方向を長軸にとる長方形プランの土坑。垂直に近い掘肩をもち、底面は平坦（いくぶん船底状）となっている。埋土は基盤上のブロック（拳大～人頭大）があたかも充填されたが如き様相——掘削後、時を経ずして、埋戻されたような——を呈している。

S K02 S D02の北6mほどのところで検出された土坑。殆どが発掘区外となるが、形状埋土よりS K01と同様の長方形プランの土坑と考えられる。ただS K01に比べ埋土のブロックが幾分小ぶりである。

S K03 S D03により壊されているため形状は明確ではないが、わずかに残る西・北辺の形状埋土等はS K01の特徴と同様である。

S K04 S D05の北5m地点で検出された土坑。大部分は発掘区外にあたるが、両辺の形状、埋土等から長軸を南北方向にとるS D01と同様の長方形プランの土坑と考えられる。なお、このS K04の両側に円形プランの土坑S K09, 10がS K04の長軸に対して直交—東西方向に並んで存する。がしかし発掘区の制約から両者の関連については不明である。

S K05 S K02の北西隅に位置する径0.3mほどの円形プランの土坑。北西隅に位置するS K02との関連も想定されるが、判然としない。

S K06～08 径0.5～0.9m、深さ0.1m前後の略円形プランの土坑、埋土はいずれも包土。S K07はS D03により壊されている。

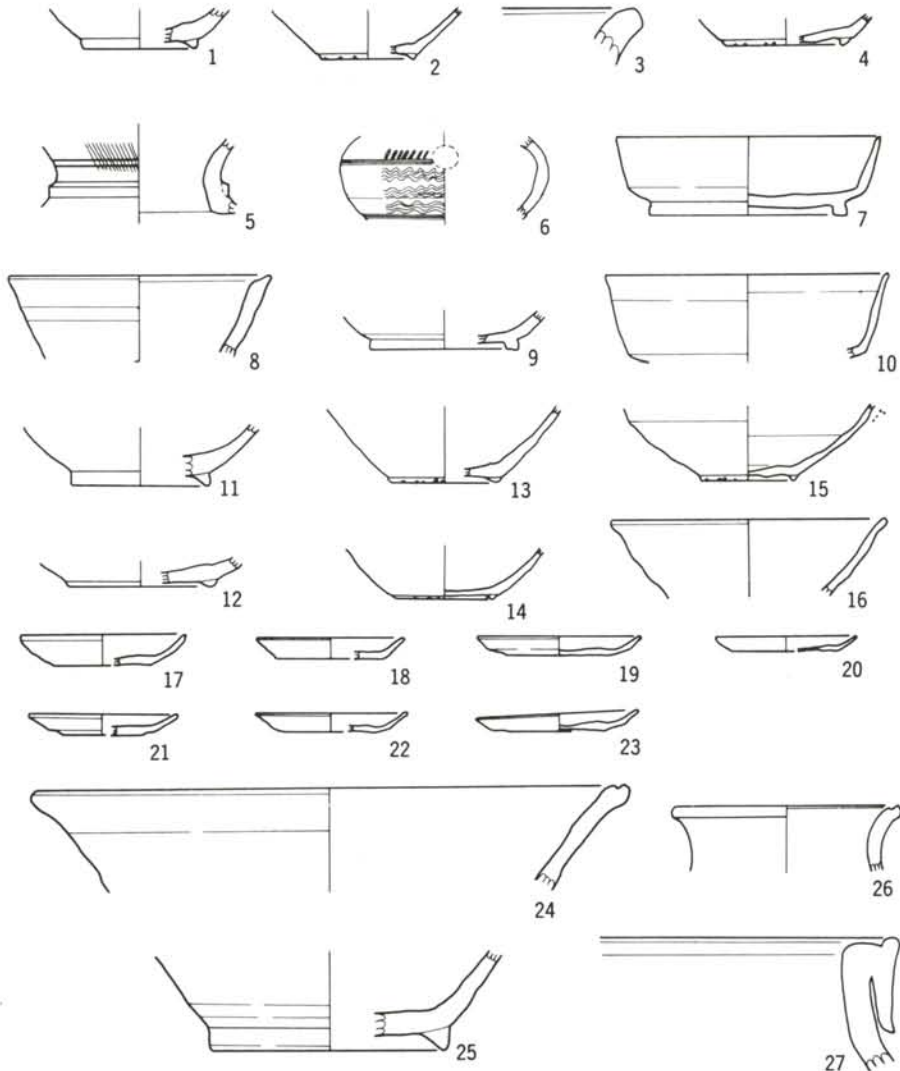
S K09, 10 径0.2m、深さ0.1m前後の円形プランの土坑。埋土は黒褐色土。その位置関係からS K04との関連が注目されるのは上述のとおりである。

福田川旧河道跡 調査区の南半において検出。調査区と流路方向が重なるため、調査区の北端より66m以南は河道跡にあたる。河道内埋土は脆弱であったため深く掘り下げることは不可能であった。所謂「護岸工事」は認められなかった（第30図）。

出 土 遺 物

出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器、瓷器(灰釉陶器、緑釉陶器)、所謂「中世陶器」及び中国製磁器がみられた。いずれも破片ばかりである。遺構に伴なったものは少なく、大多数は飛行場建設による整地土(周辺の微高地からの搬土)層中からの出土である。

S D 01 灰釉系陶器碗(山茶碗)の底部片2点(1・2)、口縁部片1点及び常滑窯産の壺甕類の胴部片2である。1は、産地を特定し得ないが所謂「南部系」とされるもので、高台の形状等より13世紀代に比定されるものである。2は、所謂「北部系」「美濃系」と呼ばれる土の均質なもので、その形状から14世紀代と比定されるものである。口縁部片について



第32図 I J A 60遺物実測図(1:4)

ては胎土から美濃系と推定されるものであるが、時期を特定し得ない。

常滑窯産の壺甕等については胴部の細片ということからやはり時期を特定し得ない。

S D02 灰釉系陶器碗の底部片1点(4)が出土した。所謂「北部系、美濃系」の均質系といわれるものである。その形状から14世紀代と推定される。底部外面に「墨書」の痕跡が認められる。

包含層 5は弥生土器の壺の頸部。6～10は須恵器。6は5世紀末に比定される甕(推定)の肩部片で胴部に波状紋が三条めぐる。7・9・10は高台付坏身で8～9世紀代に比定されるもの。8は鉢(?)の口縁部片、時期は特定し得ない。11～27は灰釉系陶器の碗で12～14世紀代に比定される。17～23は皿で、13～14世紀代に比定される。24・25は13世紀代に比定される鉢で、24は口縁端部が肥厚し、端面に一条の「沈線」がみられる。26は壺の口縁部片、胎土等から常滑窯乃至猿投窯(東山窯)産と考えられるもの。27は常滑窯産の甕。

小 結

幅1.5m、長さ80mほどの巾狭な調査区にもかかわらず、溝5条、土坑10基および旧福田川河道跡、等々の遺構が検出され、阿弥陀寺遺跡の北部の様相について知見を得ることが出来た。殊に、「方形土坑」の検出は、前掲のI J A61B地点の調査結果とともに、注目されたところである。すなわち、従来の環状2号線(一般国道302号)用地内で調査では鎌倉～室町時代の「屋敷地」の検出はみたものの、「方形土坑」は認められず、一方、隣接する^{つちだ}土田遺跡(西春日井郡清洲町)では、「屋敷地」とは地点を異にした周辺に「方形土坑」が集在する状況が認められていた。これについて今回の調査によりこの阿弥陀寺遺跡においても土田遺跡と同様に「屋敷地」とは地点を異にしたところに「方形土坑」が集在するという状況が十分に推察されるにいたったのである。このことと関連して東西・南北方向を走向方位とする溝が検出され、従来の土田遺跡、阿弥陀寺遺跡の調査で認められている一種の方格地割のひろがりについての知見を1つ加えることができたことも、調査の成果といえよう。

2. 方領遺跡（I J H60地点）の調査

方領遺跡^{ほうりょう}は、愛知県海部郡甚目寺町大字方領地内に所在する鎌倉・室町時代を中心とする遺跡である。遺跡の周辺は阿弥陀寺遺跡（前掲）と同様に第2次世界大戦時の飛行場建設、その後の開墾（水田化）により大きく改変され、現在は平坦な水田地となっている。今回の調査地は、阿弥陀寺遺跡 I J A61地点（前掲）の北西約500mのところの農道部分である。

調査は、愛知県教育委員会文化財課（加藤安信）の指導のもとに、海部郡甚目寺教委により、昭和61年3月に実施した。

基本層序

調査地の基本層序は、上から農道盛土、旧水田耕作土、床土、黄褐色砂層の順である。遺構は、いずれも旧水田耕作土、床土直下において検出された。なお、前述の阿弥陀寺遺跡でみられたような飛行場建設に伴う整地土層（盛土）は認められない。このことは、遺構検出面が標高1.8m前後と、阿弥陀寺遺跡に比べて高いことと関連しているものと考えられる。すなわち、この方領遺跡周辺は飛行場の造成に際して削平されたものと考えられる。

遺 構

検出された遺構は、鎌倉・室町時代に比定される溝2条および時期不明の土坑1基および20世紀代（明治～昭和？）の「落ち込み」が1箇所である。

S D01 発掘区の西端で検出された南北方向の溝（幅1.0m、深さ0.3m）。西側肩部にピット状の凹みがいくつかみられる。埋土は暗灰褐色粘質土、埋土中から13世紀代に比定される灰釉系陶器碗（山茶碗）が出土。

S D02 発掘区の東部で検出された東西方向の溝。走向方位が発掘区と重複するため南側の溝の肩を検出するにいたっていないが、埋土の状況から「溝」と推断した。埋土は暗灰褐色土で断面がレンズ状の砂層が部分的にみ



第33図 調査区（I J H60）位置図（1：5000）

られる。埋土中より小片ではあるが灰釉系陶器碗（山茶碗、鎌倉時代？）が出土。

SK01 SX01の底面で検出された土坑。埋土は暗灰褐色粘質土。出土遺物はなく時期等は不明。

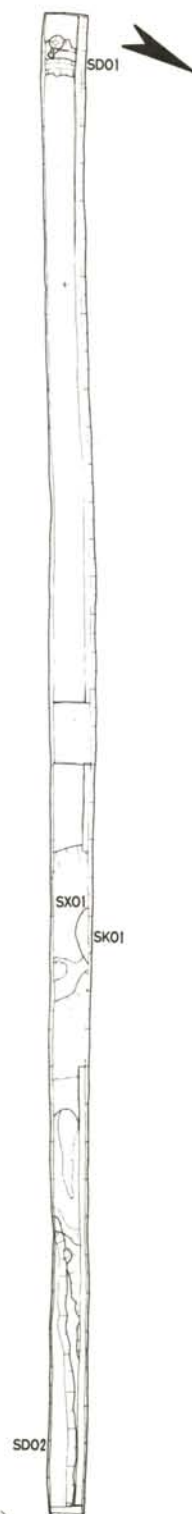
SX01 発掘区のほぼ中央で検出された溝状の「落ち込み」。埋土は青灰褐色土で、所謂「ドブ土」様である。遺物は鎌倉時代～昭和にいたる時期のものが含まれている。

遺 物

図示し得ないがSD01より灰釉系陶器碗（山茶碗）の底部片が3個体ほど出土。いずれも厚手の底部に比較的丁寧な造作の貼付高台がつくものである。その形状から13世紀代に比定されるものである。SD02からは、灰釉系陶器碗（山茶碗、鎌倉時代？）が1点出土。胴部片で図示し得ないが、SD01出土品に類似する。このほか、SX01より鎌倉時代の灰釉系陶器碗をはじめ各種の遺物の出土がみられるが、量的には圧倒的に明治～昭和のことが多い。

小 結

巾1.5m、長さ50.0mの巾狭な調査区の調査であったが、今回の調査の成果としては隣接する阿弥陀寺遺跡および土田遺跡（西春日井郡清洲町）と同様に、鎌倉・室町時代の南北・東西方向の溝が検出されたことがあげられよう。このことは南北・東西方向の溝による区割がこの方領遺跡にまでおよんでいることを示唆するものであり、当該地の「土地開発」の問題を考える際の知見を1つ加えることとなったものといえる。



第34図 方領遺跡遺構図（1：400）

版 図

図版1 大洲遺跡



北より



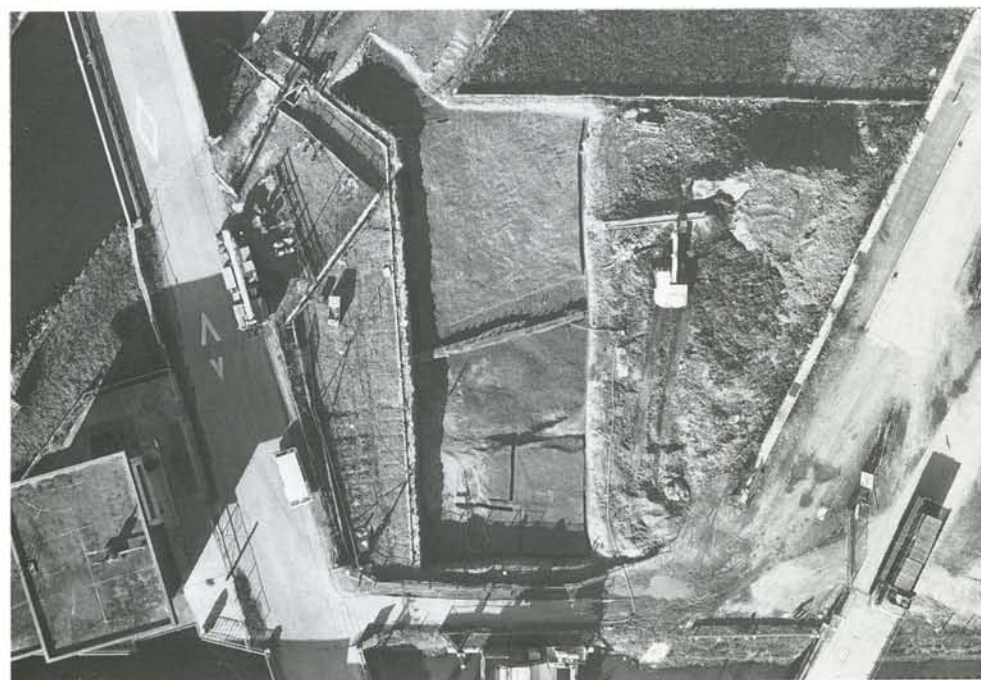
南より



北西より



SK01 (西より)



全 景

図版2 阿弥陀寺遺跡 (I J A61A区)



西より



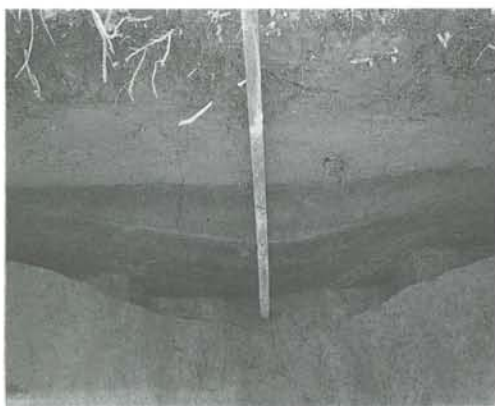
西より



S D 31 (西より)



S D 32 (西より)



S D 31埋土



S D 32埋土

図版3 阿弥陀寺遺跡 (IJA61B区)



西より



東より



西より



西より



S K 06埋土



S X 01埋土

図版4 阿弥陀寺遺跡 (I J A61B区)



I区 西より



I区 東より



II区 西より



II区 東より



III区 西より



III区 東より



IV区 東より



IV区 西より



第10図 42



第10図 50



第10図 51



第10図 52

(右：外面 左：内面)



第10図 67



第14図 166



第14図 178



第14図 173



第14図 168



第14図 168



第14図 170

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第4集

大 湊 遺 跡
阿 弥 陀 寺 遺 跡

1988年3月31日

編 集	財団法人
発 行	愛知県埋蔵文化財センター
印 刷	西濃印刷株式会社